
火星御留流山至示現流

8 4 g

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

火星御留流山至示現流

【Nコード】

N9640N

【作者名】

84g

【あらすじ】

ナチスドイツの圧倒的勝利に終わった第二次世界大戦から世代が代わってもなお戦後から脱せられない2003年。人々は火星開拓に明け暮れる。火星御留流剣術である山至示現流の二人組は、稀少液体金属マルスニウムの発掘を成功するが、マルスニウムには二刀流の番人が居た。金星軍人が！ マイナス宇宙の怪物が！ 月面忍者が火星の大地を部隊に戦いを繰り広げる！縦書き・横書き用にそれぞれ調整されたふたつの物語。

〔縦書き用〕 火星英雄編 (前書き)

縦書き版なので、縦読み推奨。

横でも構いませんが、少なくとも作者は想定していません。

で、横書き版には話的に繋がらないので、こっただけ読んでもあっちだけ読んでもOKです。

〔縦書き用〕 火星英雄編

〔序〕

過ぎ去りし近未来。

ライヒ研究所の実証したオルゴン抽出技術によって、第二次世界大戦はナチスドイツ連合による圧倒的勝利に終わり、世界征服と云って差し支えの無いほどの戦力を広げていた。

そんな中、反抗の機会を待ち、十年の雌伏を経てソビエト・アメリカ連合は、間接的にナチスドイツ指導者の殺害に成功する。

だが、指導者の死亡から間髪置かずに登場した次世代指導者、トラウム・ヒトラー。

トラウムは『自身は先代とその姪との間に生まれた子供であり、そのスキヤングラスな事実を隠すべく名乗らなかつた』と主張。

それを立証及び否定するために、全ての軍事国家はヒトゲノムの完全解明を目標に、クローン技術や人工臓器技術を発達させ、世界は三度目の世界大戦へと静かに、それでいて確実に向かつていた

西暦二千三年。

過ぎ去りし過去、過ぎ去りし近未来。

時代は二度目と三度目の世界大戦の境、場所は人種隔離政策によりナチスドイツとその同盟国のみが住まうことを許された惑星から始まる。

〔巻〕

錆と埃の混ざった赤い風が吹く。

入道雲まで赤い、そして雨までも鉄臭い。

夏の六カ月目、正常な気象だ。

「良虎、もう諦めよう…食べ物も飲み物もない。死んじゃうよ…」

連れの言葉に、女性は飽き気味に何度目かの同じフレーズを吐き出した。

「あのね、真一？　云うだけでもカロリー使うのよ？　汗と弱音は少な目に、よ」

“ここ”には地球と違って海がなく、塩を手に入れるには岩塩地層を発掘しなければならず、希少金属^{レアメタル}ほどではないが、卑金属よりは遥かに高価なものとして扱われていた。

「それに、食料のことは考えてるわよ…でもね、逃げるのと諦めるのはいつだってどこだってできる、今が勝負時、待つのはいいよ」

彼女は美人といって良い容姿であり、さらに流れる汗によって化粧以上に輝くタイプの女性だったが、パートナーであり夫の真一は、性別が逆ではないかと思わせるほどに細く、汗をかくと一層貧相になる類の男だった。

「…なんか音がしない？　人間狩りしてるみたいだよ？　ここも危ないんじゃない？」

「あれは遠くよ、流れ弾がここまで飛んでくる確率は、ドームの中で無差別テロに会うより低いから安心しなさい」

荒んだ地平線の向こう。目では捉えられないが、遮蔽物^{しゃへいぶつ}も無く、乾いた空気は彼方の銃声と悲鳴を響かせる。良虎の顔は暑さと乾き以上に甲高く、幼い悲鳴に表情をゆがめていた。

「…戸籍が買えない人間は…人間じゃないっていう考えが…胸が悪くなる、この脈が当たったら保護団体でもやる？」

「あれ？　てつきりその為に脈を狙ってるんだと思ってたけど、違うの？　良虎」

夫の問いに、妻はただ浅く、思わせぶりに笑って見せた。

「ん…欲しいものが有るんだけど、今はヒミツ…って、真一、あ

そこ見て！」

良虎が指差す先、赤い台地に裂傷が走っていた。

「…来た！ 真一！ あなたの考え…正しかったわよ！」

“ここ”に地震はないので、この亀裂は別の要因によるものなのは間違いない。

痛々しいまでに力強く大地は割れ、そこからは真っ赤な、ただ真っ赤な、地球から見る夕焼けのように真っ赤な液状金属が溢れた。

「年に一度の…マルスニウムの大噴出現象ッ！」

「真一、あなたの考えは正しかったわ！ あたしたちは大金持ちよ！」

ここは火星。

地球の二倍の暦を持ち、塩が青春と同等の価値を持つ、剣と男の世界、旅人が往く前人未到の鉱山。

ここは火星。

大気と明かりだけが地球化^{テラフォーミング}によって用意され、ナチスドイツの植民地 宇宙の最果ての山。

ここは火星。

母なるガイアに甘やかされた人間を拒み、開拓者だけが住まうことの許される世界、チヨモランマを見下ろす標高二万メートルの神々の山脈。

〔弐〕

マルスニウム

火星でのみ取れる金属であり、人類が認識できる金属の中で唯一、反陽子⁺陰子を内包する。

その陰子の性質なのか、生命だけが放つエネルギーであるオルゴン周波数を持つなど、性質に謎が多く、それだけに研究価値が高く、地球・月・火星・金星と人類生活圏^{ハビタブルゾーン}ではどこでも研究されている。ただ、何に使われるかは火星開拓者にとってはどうでもいい。とにかくどこにでも売れるということは外貨に換えやすいということである。

「真一、重機業者が来たわ…手荒な交渉は私に任せて、あなたは隠れてて？」

火星の重力は地球の約三分の一しかないとはいえ、さすがに人力で金属の採掘・運搬はできず、火星開拓者は採掘には下請けの業者を雇う。

もちろん、その下請け業者も火星を生きぬくタフさを持つ男たちであり、油断は死と略奪を意味する。良虎は武器の包みを片手に、声を荒げる。

「そこで止まりなさい、重機はそこで留めて、ひとりずつ降りて来てちょうだい？」

視認でき、声は届くが、近いと表現するには語弊がある、そんな距離だった。

「ご連絡を頂いたボーゲン運送の社長、ボーゲンです。そちらは？^{しちがしゆく}七ヶ宿さんですか？」

ボーゲンは太鼓腹に柔和な笑顔を浮かべ、好々爺^{ちいぢい}たる人物だが、それで相手への評価を歪曲させる必要はない。

悪人と善人、敵と味方に境界などありはしないのだ。

「^{リョーコ}良虎・P・^{ボウ}七ヶ宿^{シチガシユク}よ。わかったならさっさと作業してちょうだい。私は一秒でも早く帰って冷えたペプシを飲みたいのよ」

「もちろんですとも。ただ…まあ、この挨拶は必要でしょう？ 死

ぬ前に云い残すことは」

ボーゲンの後ろからぞろぞろと出てきた男たちはボーゲンと全く同じ笑顔を浮かべ、その人数から七福神を連想させる。

ただ手に持っているのは釣竿や福袋ではなく、黒光りするリボルバーだが。

「この挨拶は要らないかもしれないけど訊いておくわ、どういう心算で？」

「これも不要でしょうが、応えておきましょう。この荒野では殺人も違法ではない、そういうことですよ」

厳密には法は適応され、裁かれはする、なにせ殺人捜査は科学の発展によって数多のハイテク機器を投入された。

だが、その設備には大金を要し、火星政府は予算削減のために殺人事件を『軽犯罪』に分類し、その専門器具の導入を渋った。

意識すれば、資産に余裕があるならば地力で調査すればいいし、無いような貧乏人は泣き寝入りしろ、そういう法律だ。

「月並すぎて泣けてくるわ、あなたたち、死ぬ準備はできていて？」
良虎の準備していた包みは、自身以上の丈をもち、その大きさに

ボーゲン運送の社員たちは覚えがあつた。

「へえ、光子バズーカですかい？ それで護身する気なら……」

詳しい講釈は避けるが、原理的には光さえあれば弾丸や充電の必要がなく連発も効く武器で、その特性から国籍を問わず各国のが使っている武器だ。

「……あんたバカだ！」

火星の大気は人間が呼吸こそできるが、決して清らかでも澄んでもない。

地球上でもウズベキスタンなどでは多々ある現象だが、赤く乾いた風に混じった錆と砂は、精密銃器に蓄えられ、機能を狂わせる。
故に、現代を火星開拓時代と人は呼ぶ。アメリカ大陸を開拓したあのときと同じ武器を使うから。

「そいつは密閉ドーム以外ではダンベルにもならん。外ではこつち

だろ」

ハフニウムやタングステンの^{オーバータングステンカーバイト}の極超硬合金で作られてはいるが、そのフォルムは西部劇のそれとも大差ない。

オートマチックでもないので使用者の負担も大きく、連射に向かないシングルアクション。

だが、弾丸すら貴重な時代、連射するバカは殺されるより腕が悪いとされる火星では一発でしとめるならば回転^{リボルバー}弾倉の拳銃は最良の武器のひとつであつた。

「抜いて良いんですぜ、お嬢さん。そんな精密機器、解体して清掃しないと無理ですわ」

「親切にどうも。紳士の皆さん…お言葉に甘えさせてもらうわ」
だが、当の良虎に焦りの色はない。

巻いていた布を風の如く翻し、鏡の如く磨かれ広い鉄の表面を晒した魂。

大人がふたりで肩車をしたほどの長さ、大人の肩幅ほど有る幅、それが良虎の武器だった。

「でっかい刀あつ!?!」

「改めて名乗らせてもらうわよ? ^{かせいおとめりゅう} 火星御留流剣術、^{さんじげんりゅう} 山到示現流:

三代目当主、^{リョーコ}良虎・^{ボウシ}P・^{シチガシユク}七ヶ宿。

この刀の名は、^{アカムシ}蛭一文字!…見てのとおり、ただ大きい日本刀、ヒトキリボーチョーよ!」

示現流。

長い歴史の中で数多の流派に分かれたが、相手よりも巨大な刀を相手より速く振り回すという純粹に美しく強い姿勢は概ね一致している。

その強さは、江戸時代、藩の外への漏洩を恐れ、藩によって藩の内部でのみ伝承を許される御留流として制定されていたほど。

「…まあ、エドでは強かつたんでしょうがねえ…闘争はメタゲームにしてシーソーゲーム。銃器が流行ってしまえば、そんな鉄屑、怖いわけがないでしょう?」

「あら？ それなら紳士の皆さん？ 怖くもないのにどうして撃つてこないのかしら？」

「……！」

運送会社の人間たちは気付いていた。良虎が刀を構えたその姿は、堂に入るといふ表現が合うものだった。

寸分の隙も見当たらず、刃の届きえない位置に居て拳銃を向けているというのに、彼らは緊張しているのだ。

「命の取り合いは初めて？ それなら……レディファースト、戴くわ！」

飾り気こそないが、戦国時代の甲冑に似ており、それは赤い砂を巻き上げて良虎の身体から剥がれ落ちた。

重力が地球の約三分の一しかない火星では、廃用症候群によって筋肉が衰弱していく。

火星に骨を埋める気の人間や、擬似重力のあるドーム内生活者以外では、必須のものだ。

別に計算する必要も無いが、その重さは地球重量で三百十二貫、一貫は約三、七五キログラム。火星では三分の一になるとはいえ、

良虎はそんな重量を着こなし、マルスニウムを発掘していたらしい。

「……撃て！ 無駄弾も許す！ 撃ち殺せ！」

良虎が疾走する。刃が嘶く。いなか弾丸が撥ねる。

古くから示現流では雲耀の太刀、つまり稲妻を追い抜く速度を標榜していた。

その剣術が火星に於いて完成した今、初速以外はマッハにも乗らない拳銃弾ごときを防げない道理もない。

良虎は自身に当たる弾丸を見極め、軌道に盾代わりの刀を置いて弾丸を防ぎ、その弾丸を卓球のように打ち返す。

戦国時代の刀で弾丸を受ければ折れるしかないが、壘一文字は滑り台のように幅広く、その素材にはタングステンやコバルトを添付した極超硬合金。
オーバータングステンカーハイト

正に日本刀。折れず曲がらず、そして万物を雲耀にて切り裂く。

「…で、やってくれる？ マルスニウムの発掘」

「はい。やります。やらせていただきます。ただ、技師の何人かが負傷してしまいましたので、本社から応援を呼びたいのですが…オルゴンパックもありませんし…」

「構わないわ。ただ態度次第では、雇い主の首が物理的に飛ぶことも教えてあげてねッ」

そう答えたのは、ボーゲン運送の中ではボーゲンの次に太っている男。

当のボーゲンが良虎の小掌打ちで悶絶し、若い社員の何人かが打ち返された横弾気味の跳弾を受けて立てなくなっただけからの質問だった。

小悪魔的という比喻があるが、ボーゲン運送の面々には良虎のスマイルが、悪の大元帥のそれを感じていた。

「…忠告、痛み入ります」

だが、次に飛んだ首は、首は首でも良虎の右手首だった。

全く以って唐突に、言語道断なまでに唐突に、その男は滾るマルスニウムの中から這い出してきた。

〔参〕

「…名乗っては貰えるんでしょう？」

「みやもとだんてつ宮元断鉄。父は野田系の二天一流だったが、儂自身はほとんど我流だ」

儂という一人称を使っているが、手首を刎ねた男。断鉄は良虎より幼く、ひよつとしたらまだ十代かもしれない。

反りのない幅広の刀、明らかに同田貫の思想を継ぐオーバータングステンカーバイトの日本刀を抜き身で両手に備えている。

「はじめまして。断鉄くん。それじゃ戦う理由の説明をお姉さんにしてくれる？」

「…時間稼ぎのつもりだろうが、最初から僕は邪魔する気はない。さっさと腕をくっ付ける。会話のキッカケにただただ」

「ああ、そお。ねえ、ボーゲンさん？ あなたのオルゴンパックを貸してくださる？」

先ほどから気絶していた風に見せようとしていたボーゲンに向け、良虎は目もやらず断言する。

ボーゲンも反抗は無駄と悟ってか、土方弁当ほどの大きさの箱を良虎に投げつけ、受け取った良虎はその箱を口に銜え、啻一文字を地面に付きたてて代わりに切断された右手首を拾い、傷口に押し当てた。

「…じゃあ、お言葉に甘えて」

良虎の声に反応するように、先ほどの箱が光りだした。

これこそ、ナチスドイツの第二次世界大戦における圧勝を支えた超科学、オルゴン科科学。

性的絶頂〃オルガズムを語源とし、一部の研究者はオーラ、プラナ、経絡、気などと称するエネルギー工学の一派である。

操縦者の生命力だけで飛ぶオルゴンロケットは宇宙開発においては無くてはならないエネルギーソース。

オルゴン吸収技術を軍事転用すれば、敵国軍からオルゴンを吸って老衰に追い込み、逆に吸収したオルゴンによって自軍を癒す。

完全無公害のエネルギーは、小さな箱ひとつで切断された腕の再結合させていた。

「改めて聞かせてもらえる？ あなたの主張。どうしてこんなことをするの？」

「マルスニウムの採掘をやめて帰れ、もう二度と来ない、そう約束してくれるだけでいい。マルスニウムは誰のものでもない、これはここに必要なんだ」

「ここは“それはなぜ？”と訊くのを待ってるんだらうけど…やめ

ておくわね」

「ならば儂が問おう。それはなぜ」

「どんな理由だろうと、私はマルスニウムを諦めないからよ」

互いに退路なし。ボーゲン運送とそれを以前から隠れて見守る真一。傍観者となった皆の視線がふたりの剣士の三本の剣に注がれる。「社長。私らはどうすれば良いんですかね？」

「今は動くな。良虎が勝ったらマルスニウムを採掘する。あっちの二刀流の剣士が勝ったなら云われるままに逃げ帰る。まずは様子見だ」

多刀流の戦法は、一方の刀で攻撃を受け止めてもう一方の刀で反撃するものと思われがちだが、最初から防御を考えているならば盾でも持った方が合理的というもの。

ならば二刀の利はと云うと、双方の腕による連続攻撃。防御など不要、相手が打つ前に斬ればいいのだ。

ここに、山至示現流対二天一系我流による、超攻撃的剣術の対戦となった。

「あなた、強いわね。断鉄くん？」

「そうだな」

断鉄の薄っすらな言葉に続き、良虎は無言でほんの一瞬、真一が隠れている岩塊に視線を向けた。

「…え？」

真一がその意味も理解できないまま、良虎は蛮一文字を振り上げ、相対すべく断鉄は二刀を構え、剣士たちの四本足は火星の砂を踏み散らし、一点へと向う。

音速を越える剣閃を可能とし、マッハを越えた証たるソニックブームさえも武器とするのが山至示現流。

火星では気圧等の都合で地球より幾分か音速が遅くなり、肩の振りが時速百キロに達するならば、その先にある手首の速度はそれを上回る百五十キロ、そしてさらに先にある刃は更新加速をし、切っ先の速度は音速さえも超越していく。

蛮一文字重量×良虎腕力〓超音速、空間に衝撃波を撒き散らし、断鉄を両断すべく振り下ろされた。

だが、断鉄はあっさりと、その一撃を両刀で受け止めていた。

「やっぱり…ダメね」

「そうだな」

罅迫り合いとなれば、あとは腕力の勝負にしかない。組み合ったままの蛮一文字は容易く二刀に弾かれ、体勢の整った二刀は良虎のヘソから入ってそのまま脇腹に抜け、良虎の胴体をVの字に切り裂いた。

〔肆〕

「良虎オーツツ！」

岩塊から飛び出した真一が血塗れの良虎に飛びついて叫ぶが、ボーゲン運送にも断鉄にも相手をしている暇はない。

「さて…」

「お待ちください宮本さま、私たちもヒマでは有りません。あなたさまと戦ってまでマルスニウムは欲しくはありません、ここは引かせて頂きます、お約束します」

「…本音なんだろうが、お前たちの中の何人かはここを忘れられないだろう？ 自身で来なくとも、ここの情報を教えるかもしれない…気の毒だが」

続く言葉を待つことは、先制攻撃を断鉄に許すだけだった。

「撃ち殺せえッ！」

ボーゲンの合図とともに、ボーゲン自身も含めた七挺の撃鉄が息も揃え、拳銃の射程距離を保つべくバックステップを交えて鳴る。

七人は良虎から受けた痛みに耐え、数で勝り、かつ刃物を相手にするときのセオリーに忠実に応戦している。

「やはり、ハイドラシヨックか……」

ハイドラシヨックを説明するには、軟弾頭と硬弾頭から説明しなくてはならない。

硬弾頭は対象を易々と貫通できるが、それだけに対人効果としては“穴”を空けるだけに留まるが、軟弾頭はその軟らかさゆえに人体に接した瞬間に潰れ、貫通せずに体内で止まる。

体内で止まった軟弾丸は、ビリヤードのように残存するエネルギーを発散し、体内をミンチにする。

ハイドラシヨックは軟弾頭の代表的弾丸で、命中さえすれば皮を切り、肉を爆ぜ、骨を割り、手足であろうと急所と化し、その激痛は死に値する。

「さすがに、七挺は止められんか」

何発かは刀の峰で受け止めたが、限界はある。

断鉄の刀は蛮一文字ほど幅広でもなく、断鉄自身は良虎ほど対弾^{アン}剣術^{チカン}を研究したわけでもない。

手首に一発受け動きが遅くなれば、次の弾丸は胴体に、さらに動きが遅くなれば首と足にミートシェイクのクレーター。

「まあ、止められないただが」

嗜血しながらも断鉄は気にもせず走り続け、社員二名との間をあっさりと詰めて袈裟懸けと胴輪切りにした。

「ジョーニアス！ キサブロウ！」

社員の誰かが斬られた同僚を名を呼んだが、応える人間が居るわけもなく、その声も銃声に掻き消される。

「せっかくだ、使わせてもらうぞ」

断鉄は刀を腰の鞘に収め、死んだ二人のリボルバーを拾って二挺拳銃^{ドローリボルバー}。

弾丸充填をする直前だったらしく、左右合わせて五発しか入っていなかったらしく、すぐに弾切れを起こしたがそれも関係ない。

五発の弾丸はそれぞれ残りの五人の五つの心臓を吹き飛ばし、断鉄は弾切れに気づきもしなかった。

「さて…と、男、立て」

良虎の死体を抱き締めている背中に、断鉄は弾丸切れの銃口を押し当てているが、真一は無視して死体に向けて喋っている。

誰も気づかないが、先ほど断鉄に命中した数少ない弾丸が抜け出していた。

もちろん貫通していたわけでもなく、青虫か何かが内側から押し出ているように肉が盛り上がり、弾丸を押し出している。

「良虎…？ 良虎オア！ アアあアアッ！」

火星の猛暑のために汗も流しつくした真一には目頭が熱くなっても涙として流れる水分は無く、流れない涙に比例して悲しみが蓄積されていく。それでも真一は少しでも悲しみを解き放つように良虎に戻ってきてもらうために啼き続ける、吼え続ける。

それは覇気もなく、絶望の中から出ようとすら考えられない愚図。火星開拓時代といってもその全土に人が住んでいるわけでもなく、この場所のように未開発の地区からでは車があっても帰るのに苦労する距離があり、放置していても真一は死ぬように感じられ、断鉄にしてみれば殺す方法を考える方が面倒だった。

「怒りも憎悪も執念もない人間を…男とは呼ばん、勝手に死んでいる」

すでに断鉄の全身に傷はなく、服にいくつか穴が残るのみ。

オルゴン治療以外にありえない現象だが、かといってオルゴン治療だとしても“肉の再生の勢いで弾丸を押し出す”なんて芸当ができるわけもない。

それができないからこそ、軟弾頭射撃はオルゴン全盛時代たる現代で主流武器として扱われているのだ。

断鉄の罵倒にも謎にも気づかずただ叫ぶだけの真一をよそに、断鉄は無言でマルスニウムの中に入水する。

液体金属の中で生きられるわけもないが、かといって自殺するわ

けもない、何か裏があるのだろうが、真一は気にも留めない。

「はあ、つふウツ！ アアアア！」

断鉄の正体も、超オルゴンと云うべき治癒能力も、なにかもを真一の眼中にない。

ただ、最愛の女性の死亡によって悲しみを膨らませているが、その悲しみは前を向いてすら居ない。

噴出したマルスニウムが沈下していつてから暫く経った頃、社長たちからの連絡が絶えたことを不審に思っ
て巡回に来たボーゲン運送が保護するまで、彼は叫び続けていた。

保護されて自宅に戻ってから、真一は腐っていた。

他人を人生の大前提に据え、その人物との人生しか考えられなかった負け犬。

最愛の女性、七ヶ宿良虎の死に、自殺すら考え付かないほどにこの男は腐敗していった。

ふたりで貯めていた現金を切り崩し、サプリメントを胃に流し込み、思い出のこもった家の中を徘徊し、夢の中ですら悲しみ続けている。

それはもう人間ではない、体温があつて動き回れるだけのことで生きているとは云わず、感情がひとつだけしかないならば自動人形と呼ぶべきである。^{オート}

何日が過ぎたのか、朝も夜も、前も後ろも、未来も過去も、感情も気力も失っていたその日、チャイムが鳴った。

〔伍〕

チャイムが鳴った。

火星では昼夜もなく、様々なベンチャー企業が騒音を上げながら作業しており、静寂とは程遠い環境だったが、真一にはとってはこの来訪者は久方ぶりの波紋だった。

良虎が帰ってきたんだろう、彼女の指紋でもドアは開くはずだが、両手が塞がっているのだろう…そんなありえない妄想を真一は確信した。

真一がドアに向かっていている間に何度か催促のチャイムが鳴ったが、真一は急ぎもせずに玄関に向かい、ドアを開けた。

「よお、七ヶ宿良虎の家だよな？　ここ」

良虎じゃないならドアを閉めよう、そんな考えで無言・無造作にドアを閉めようとしたが、男もこれまた無造作にドアに膝を挟み込んだ。

「待て待て待て。話くらい聞け…えーっと、俺、お前の名前知らないよな？」

「知らんませんよ」

何日、言葉を発してなかったのだろうか。啼き続けた声帯は言葉の出し方を忘れているかのようだった。

「俺がお前の名前を知らないって知ってるんなら、教えてくれてもいいんじゃないか？」

「知らないですのは、それ意味じゃない、ボクはあなたがボクの名前を知らないかどうかを知っているかしないかを知らないんですよ」

「…お前、どこの国の人だよ？」

「どうでももうござんせば、帰らなくても帰っていきんさい」
言葉の意味なんてどうだっていい。良虎以外に思いなんか通じなくて良い。

「じゃあ良虎のヤツがいつ帰ってくるか教えてくれ、その時間にまた来るから」

「良虎は…良虎は…あれ？」

良虎がいつ帰ってくるのか真一は分からなかったし、それでも思

い出そうとすれば、思い出されるのは当然、断鉄に顔面を潰された良虎の姿のフラッシュバック。

「あ、あ…アア？」

「つて、オイ、どうした」

真一はドアから手を離し、胃液を玄関に嘔吐しだした。

固形物を食べていないためか空嘔吐を繰り返し、臓器そのものを吐き出すように唸り続け、当然のように舌根沈下から呼吸困難にコンボを繋ぐ。

「同居人、しっかりしろ。オイ、どうしたんだ」

来訪者は服に胃液を飛び散らされながらも、痙攣けいれんを始めた真一背に担いだ救急車が有料の火星では割と普通の光景だ。

「だあー！ 鼻水と胃液と涙でグショグショだチクショー！ 洗って返せよテメエッ！」

「なみ…だ？」

感情によつて流れたものではない、自律神経によるオートマチックな反応だ。

荒野では泣きたくても脱水症状で流し損ねた涙が、町の中では感情が追いつかなくても流れる。

「やっと…涙が出たんだよ」

人間の涙は、込み上げる感情を洗い流すためにある。悲しみのごく一部とはいえ、減った分だけ人間は理性を取り戻せる。

嘔吐と共に流れた涙によつて、真一の時間は秒針が時針程度のスピードしかなくとも動き出していた。

〔陸〕

「そうか、良虎は死んでたのか」

「ハイ、そうなのですだ…スンマセン、言葉が上手く使えねえんだっぜ」

液化化オルゴンの点滴をぶち込み、真一の顔にはやっと赤みと表情が戻ってきていた。

「気にするな、俺も言葉遣いは綺麗なほうじゃないしな…えーっと、名前、聞いたっけ？」

「ハイ、お教えしましたです。ボクは七ヶ宿真一、良虎の夫です」

「じゃなくて、俺の名前を教えたかって方。俺の名前は下柘植百兵衛^{しもつげ ひゃくべえ}、良虎の父親、猛虎と古い知り合いでな、今は月面忍者伊賀組の後方部隊…まあ、俗に云う背広組、ってヤツだな」

オルゴンによる再生技術は戦場に革命を呼んだ。

歩兵ひとりの撃破に突撃銃の弾装を三度交換する必要があるとされ、近接格闘のプロフェッショナルである忍者の復興が行われた。

当初は、日本の同盟国であるナチスドイツ総統による話題作りの政策とされていたが、月面の低重力下で求められる立体的戦闘において忍者という戦闘スタイルは適合し、今では月面軍人のエキスパートですらある。

「で、良虎に聞いてるか？ 例の借金の話」

初耳だった真一はそれをまともに顔に出し、それを察した百兵衛は答えを待たずに話を続ける。

「良虎みたいに実戦剣術に携わってる人間は金欠になりやすいから、臓器を担保に金を借りることが多い…それは知ってるよな？」

「あ、はい。盲腸とか腎臓とか、外せる臓器を抜いて、代わりに緩衝材とかを入れたりしなかったりしたりするんよね」

「そう、それ。なんでかは知らないが、良虎が冷凍保存されてた臓器を買い戻そうとしててな。俺はその契約の後見人ってことで名前を貸してたわけだ。買戻しを始めたのは二千一年の八月くらいなんだが、その頃、何か変わったことなかったか？ 体調を崩したとか」「ボクと出会ったり出会わなかったりしたのがその頃やけど…お父さんからから山至示現流の当主を受け継いだって云うてはったです

トロイヤ―」

「…なんかお前と話すの疲れてきた。とりあえず資料は置いてくから勝手に決めてくれ…ただ葬式やるなら呼んでくれや、ダチの娘の弔辞ぐらいならいくらでもやってやる」

百兵衛はフロツピーを一枚を置き、ラベルに自分の電話番号を書き記してから出て行った。

火星や月では未だに電波整備が進んでおらず、多額のカンパをしなければ使えない携帯電話を持っているというだけで富裕層であることを表すステイタスでもある。

「フロツピーって…月ではこういうの方が都合がいいんかいな」

死んだ最愛の妻の秘密を知りつつも、真一の心中には悲しみが淀み、精神を捉えて離さず、未だに生きていく理由を見出せなかった。生きていくだけの活力も情性も無くも、とりあえずフロツピーをテレビモニタに差込み、内容を読み始めた。

良虎の幻影を求めるように、ただなんとなしの行為だったが、記されていた記録は、とある仮説を匂わせた。

「コレって…そういうことなのか…？」

なぜ、良虎がマルスニウムを発掘してまでこれを買戻そうとしたのか、やっとわかった気がした。

積み立てでも時間をかければ買戻せたかもしれない、けど急いでいたんだ、一日でも速く買戻すために。

そうと判れば、真一にはベッドで寝ている時間はなくなった。

「一分でも速く、これを買戻す…それで良いんだな？ 良虎…？」
言葉も戻っていた。もう迷うことはない、生きる目的が見つかった。

一度は質流れになった臓器を名指しで買戻すとすると、手間賃やら税金やらを国にカツアゲされて有象無象の臓器ならば束で買える値段になってしまう。

そんな大金を稼ぐならマルスニウムの発掘は一攫千金の場外満塁ホームラン、確立変動の大フィーバー、ロスタイムでのハットトリ

ツク、勝負好きな良虎が好みそんな方法だった。

「確実に稼いでいたんじゃ、時間がかかりすぎる…できるのか、ボクに…？」

自分自身に問いかけるが、もう答えは決まっている。

真一は、最愛の人を目の前で殺されていながら、助けることも反撃することも命乞いすらできなかった自分をクズだと認識していた。そして今も殺害した張本人である宮本断鉄に憎悪も怒りも燃やせず、ただ自責し後悔して悲しむだけの自分が大嫌いだった。

だが、それでもやるしかないだろう、クズなんだから。努力しなくても幸せになれるほど優れた人間じゃないんだから。

誰の助けもなくともやるしかないだろう、クズなんだから。こんなクズを好きだと云ってくれた女性に見る目があったと証明するためにも。

「あの二刀流剣士からマルスニウムを奪い取って、臓器を買い戻す！」

腐臭すら放ち、過去だけに貼り付いていたカスはどこにも居ない。

今居るのは、薄い大気越しに見える青い惑星を見上げ、形見の大

剣：壺アカムシ一文字を担いだ男だけだ。

〔漆〕

今年もマルスニウムが噴出した。

良虎が死んでから火星は三度公転し、短くはないが、決して遠くもない時間が流れていた。

「断鉄さん…ですよね？」

噴出するマルスニウムの湖面に座禅して浮かんでいた少年は、呼びかけに両目を開いた。

「その剣は…七ヶ宿良虎？」

「覚えていてくれたのは嬉しいんですが、そっちじゃない。その夫のクズの方です」

断鉄が見間違えたのも無理もない。真一は傭兵として各星を渡り歩き、技術を磨いた。

その際に両手両足や臓器、眼球さえも失って移植を受け、身長や血液型も変わっているが、それ以上に変わっているのが眼だった。

眼球が変わったからではない、視神経の先にある脳、いや脳の先にある魂自体があのかのときのゴミとは比べ物にならない決意に溢れていた。

「…何があつたかは知らないが、両の手は良い具合に血に染まってきたようだ。その腕は人を…両の指では足りん数を切った腕だ」

「そう見えますか」

「否定して欲しいのか、まだ素人に見えます、そう慰めて欲しいのか？」

「…断鉄さんが何人斬ったか訊ねても良いでしょうか」

「無意味だな、この世界は悪魔が作ったかのように歪み、欲望の戦いに溢れている。魚が澄み切った水に住めないように、人間は己の糞尿で汚れきった湖でなければ生きられない…人が他を傷つけないというのは根本的にありえない」

真一は自分がクズであるという確信をしつつも、人を斬ってきた自分を開き直すこともできず、それでいて責任転嫁もできず、言い訳すらできず、許しを請うこともできないでいた。

無間地獄を泳ぎつつも、そこから抜け出す方法を知らず、それでいて抜け出そうとも考えていなかった。

「一万に満たない昼夜を修行に注ぎ込んだ程度で、儼に勝てる気なのか？」

「勝たせていただきます。例えそれが何十年と鍛えこまれた剣術であろうとも」

真一の発言に、断鉄は目を丸くした。どう見ても十代である自分

に向け、何十年守ってきた、と。

「それが判つていても来るか、勇敢だな」

「…あなたの記録は調べました。宮本断鉄、最初の火星移民者の中にその名前がありました…六十年も前の」

「ならば判るだろう？ モルモット代わりに火星に飛ばされた剣術馬鹿の科学者が、少ない機材で弄っただけでマルスニウムは不老長寿を実現し、遠隔自動治療さえもできる。マルスニウムを守る為に長生きしているのか、それとも長生きする為にマルスニウムを守っているのか、判らなくなつたがね」

断鉄の説明に、真一は思った。

マルスニウムは金の林檎だ。ある神話に登場する食べれば千年間寿命が延長される架空の植物で、神話の中でもそれを巡って戦いが起きた。

その話に出てくるドラゴン、ラドンこそが断鉄だ。そのドラゴンは千年ごとに金の林檎を食べて金の林檎を守っている…守る為に食うのか、食うために守るのか、その命題を抱えたまま。

「…で、覚悟はあるのか？ 理解しているか？ それほどの力を手に入れる責任を」

それは膨大な資源だ。オルゴン供給すれば多くの人間の傷を癒す薬にもなるだろうが、そのエネルギーの方向が少しでも変われば、世界を焼き尽くす炎となる。

ダイナマイトの発案者ノーベルが、放射能の両親であるキュリー夫妻が、軍用ライフル隆盛の祖ウィンチェスター一家がそうだったように、その発見は多くの殺戮を呼びリスクを抱えているのだ。

「覚悟している…つもりです」

「そうか…ならば、何も云うまい！ 名乗れ、小僧！」

真一は、これほどに落ち着いた心で刀を握ったことはなかった。

真一は断鉄を斬りたくなかったが、それでも刀を握る手は迷いを忘れていた。

「火星御留流、山至示現流三代目七ヶ宿良虎の夫、七ヶ宿真一ッ！」

「二天一系我流、宮本断鉄ッ！」

『参るッ！』

構えは断鉄が二刀青眼の構え…つまるところ、剣道でやる開始位置に相当する構えを二刀流でやっている。

対する真一は、蛭一文字を腰溜めに構え、鞘が無いので厳密には異なるが、兎角居合いの要領で構える。

両者共に超攻撃剣術の使い手であり、勝負は当然ながら一瞬。

『ゼアアアアアッ！』

剣術においては一瞬の『機』を先んじた者が勝つ、そのための気合による圧迫、気迫の雄叫びに続いて断鉄が飛び出した。

刀のリーチ、間合では断鉄の雌雄刀に比べ、真一の蛭一文字は倍はある。機先を制さなければ勝ちはない。

ニューロンひとつ分の真一の緩みを逃さず、断鉄は両足を亜音速まで加速し、超音速で振っても間に合わないほどの近距離までダッシュを掛けている。

《勝ったぞ、真一ッ！》

断鉄の発言と剣閃は同じタイミングだったが、雌雄刀もまた超音速、その言葉が届くよりも早く雌雄刀は真一を切り裂いた

はずだった。

「勝ったぞ、真一ッ！」

実際にその言葉が真一の耳に届いたとき、身体を上下に切り裂かれ、宙を舞っていたのは断鉄の生首だった。

さながら稲光が雷鳴に先んじて見えるように、稲妻と同じ速度で放たれた雲耀の刃は、超音速をも越えた速度、極超音速にて振りぬかれ、断鉄を討ち取ったのだ。

「い、今のは…ッ？」

首だけで落下しつつも、断鉄は肺もないのに喋っていた。こんな非常識を発生させる、それがマルスニウムだった。

「…抜即斬、という地球示現流にある技を火星流にアレンジした技です。意地を用いて身体を沈め、乱流翼の追加加速で刃をマッハ数

ボルテックスジェネレーター

を六程度まで加速させる……」

技を放った真一も決して無事ではなかった。超音速すら越えた反動、音の壁との衝突によって脊椎損傷、不完全骨折を合わせて骨は二十一個折れ、左腕は根元から千切れてしまっている。

「あ、すいません、傷の再生はしないでくださいね」

真一は蛮一文字を断鉄の首の切断面に押し当て、肉が生えてこられないように押さえつけている。

かの有名な処刑具にギロチンというものがあるが、当時の医者の実験では切られた首は三十秒ほどは言葉に反応したという話もある、オルゴンで治療を受け続けている断鉄ならば会話ぐらいはできるだろう。

「……本当にする気か？ マルス二ウムを……世界に渡らせるのか？ この悪魔が作った地獄に？」

昔から何人もの人間が云ってきた。この世界を神が作ったと仮定するならばこの世界は不完全かつ残酷すぎ、悪魔が作ったとしなければこの世界の煉獄たる美しさは説明できない、と。

「……ボクは、この世界を神さまが作ったような理想郷にはできない、だけど……悪魔じゃなく、人が作れる世界はできると思う」

「歴史を知れ真一。資本主義者が肥える為に世界に貧困を植え付け、それを知ろうともせず、戦いを加速させる」

「ボクは最高のクズだ。女房を目の前で斬り殺されたのに……まだあなたを恨めないで、むしろ尊敬さえしている」

真一は、空を仰ぎ、地球を見た。あそこでも負の連鎖が続く中で、誰かが泣き、それでもまだ歩いているのだろう。

「……だけどボクみたなクズでも人は変われると信じられる、信じられれば戦いを少なくするために戦い続けると思う」

人は生まれながらに矛盾と謎を持つ。

その矛盾と謎を考えることなく人生を終える者、考えて苦しみ続ける者、考えすぎて人生を台無しにする者、様々な者がいるが、真一はその矛盾と謎と戦う決意を固めていた。

「…壮大なウソだな、だが信頼できるウソだ…」
同じく、その矛盾と謎に戦いを挑み続けた男、宮本断鉄の死に顔は、憑き物が落ちたように晴々としてさえいた。

〔捌〕

木星圏の第二宇宙植民島^{スペースコロニー}は、ガリレオ・ガリレイが発見した四大衛星のひとつ、イオに隣接するように作られている。

宇宙では所有権というのが複雑で、自国民であるガリレオが発見したからイオは自国領土であると主張するイタリア、最初にイオの調査をして石を持ち帰ったのがボイジャー7号だから自国領土であるとアメリカ、コロニーを着工した早い者勝ち主義のナチスドイツ、そんなコロニー内の隠れ里にて、伊賀忍者部隊の予備部隊百名ほどに座学を教える講師こそ、下柘植百兵衛だった。

この物語の中ほどで、真一を訪ねたあの男である。

「えー、というわけでー、宇宙空間では作用・反作用の法則がモロに出る上、真空なので火器は使えず、光子バズーカなどが合理的となる。しかし火星やイオのように複雑な大気を持つ星では精密機器は使えません、ハイ、シュトロハイム君、この両方で対応できる武器としては、どんな武器を使いますか？」

いきなり指されたドイツ人の忍者予備隊員は、慌てながらマニユアルを読み漁った。

「シロハタ、などでしょうか？」

「…それが通じる相手なら最高にステキな武器だな、ラブ&ピース…昔ながらの手裏剣などの投擲武器がこの場合の正答だな。互いに宇宙服を着た宙間戦闘では宇宙服にチビッと傷付けられいいわけ、こんな武器でも充分。また地球以外の重力がある場所ではコリオリ

の都合で手裏剣などは一層の訓練が要り、相手に奪われても問題ない」

そう云って、百兵衛は手元にあったボールペンを投げ天上に突き刺してみせる。歓声というほどではないが疎らな拍手が起きた。

「慣れると、文房具や割り箸なんかで代用できるようになるし、根来組は足で投げる技術も開発してる…俺の講義はこれで終了だ」

チャイムがあつたわけでも時計を見たわけでもなく放たれた断言だった。

受講生たちが時計を確認して体内時計の正確さに驚愕している間に、既に教壇の上に百兵衛は居なかった。

「あー、肩凝ったー」

実力主義の伊賀では、背広組であろうとパフォーマンスが必要となる。銃後が信頼できなければ成功する任務も失敗する。

タネを明かせば、目が逸れたタイミングで薄壁に仕込まれたどんでん返しをくぐって宇宙空間に飛び出し、即座に隣の部屋まで移動した体力技だ。

いかに前線を退いたといえど、上忍ともなれば宇宙服なんぞに頼らなくとも真空で三分程度は活動できなくてどうする。

「…下柘植先生の消える忍術って、てっきり幻術や何かだと思ってたんですけど…こういう技だったんですか」

飛び込んだ部屋には、机がひとつと椅子がふたつ、面談か尋問以外にやることのなさそうな殺風景な部屋には、若い女忍者が座って待っていた。

「幻術って甲賀連中が薬嗅がせてやってるアレか？ 忍者は身体は資本、ケミカルレスだケミカルレス」

「はあ、勉強になります」

「進路相談だったよな、夏見の研究は…ああ、思い出した、モモンガの術の研究してたんだよな？」

「あ、いえ、ムササビの術です、私のは」

どう違うのか筆者にもわからないが、皮膜代わりの薄布を広げて

滑空する忍術のことだ。服部^{ハットリ}の技だからあえてカテゴリーに分ければ伊賀ではある。

地球での実用性は皆無に等しいが、重力が少ない火星や月では容易に飛距離が伸びるため、奇襲作戦の肝として扱われている。軽量を生かせる部署だけあってこの夏見という女はその研究兼実用する部隊らしく、縦にも横にも小さかった。

「そうか、お前ももう卒業の歳か。希望は潜入工作か？ やっぱり？」

「はい、そうです。それで、これが記入表です」

感慨深げに、それでいて嬉しそうに剣術や手裏剣術を教えた生徒の進路の希望表を見た百兵衛だったが、その内容に目を剥いた。

「進路勤務希望地が金星の前線基地に為ってるが、なんだこれ？ 金星の重力じゃムササビはほとんど使えないし、ここの潜入工作員といえはほとんど最前線と変わらないぞ？」

金星の重力は地球の9割ほどで、人類が生活しているスペースの中では高重力に当たる。

「…故郷、なんです。そこ」

「故郷っていったって、ここはこの前の米ソ連合の砲撃でのダメージが大きいぞ？ 配属になったその日に壊滅してもおかしくないんだぞッ？」

「…だからです、だから、行きたいんです」

日本軍が負ければ、その土地や人々がどうなるかは楽観的にも悲観的にも、今とは違う姿になるだろう。

人類が本格的に宇宙で生活してからまだ一世紀と経っていないが、それでも夏見にとっては生まれて育った土地であり、彼女は長年研究した潜入工作員としての技能やアドバンテージを捨てても、その場所を希望しているのだ。

「お願いします、下柘植先生！ そこに配属させていただけないでしょうか！」

目に掛けていた生徒だった。メンタル面での弱さを指摘し、鍛え

た生徒の一人だ。

それだけに百兵衛は、高い確率での危険が付きまとう希望地を、恐怖を超えて記入した彼女の決意を察した。

何十年、教え導く立場に居ても百兵衛には判らなかった。命を守るために決意を挫くように諭すのが正しいのか、意思を尊重して死地に向かわせるのが正しいのか。

「…判った。この基地の補充要員を選定している部に掛け合ってみよう、お前を入れるスペースがあるかどうか」

こう答えたとき、夏見は笑った。百兵衛が教えた表情で、笑って見せたのだ。

二週間後、夏見が派遣された基地の壊滅を聞いたとき、百兵衛の精神はまたも限界に近づいた。

自分は安全なところで後進の指導をし、若い部下たちを死地へのベルトコンベアに乗せる機械。

誰か俺を恨んでくれ、誰か俺を呪い殺してくれ、笑顔でなんか死なないでくれ、笑顔で死ねるように教育した俺を恨んでくれ。

責任で心も身体も押し固められた百兵衛を訪ねたチャームを鳴らしたのは、七ヶ宿真一からの電話だった。

「百兵衛さん、弔辞をお願いします。良虎の葬式代わりに彼女のやりたかったことを全部やります」

〔終〕

時は地球西暦二千十年、断鉄の死から三百日ほどあと。場所はマルスニウム噴出口跡地に作られた火星金属研究所。

地下からマルスニウムを汲み上げ、そのマルスニウムを研究する私設研究財団だ。

「急げ、真一！ すぐだ！」

「急いでるに決まってるだろ、見て判らないのか、百兵衛エっ！」

「見りや判るよ！ それでも…とにかく急げ、バカヤロウ！」

その廊下を所長の七ヶ宿真一と、警備顧問の下柘植百兵衛が走る。早く行かなければ間に合わない。

廊下の先にはマルスニウム医療開発の為に集められた医師たちのスペースが有り、そこでは少なくとも真一にとっては世紀の一瞬が待っていた。

「もう、もう産まれたか!？」

真つ白の研究室と廊下を遮るアクリル板に顔面を押し付け、真一は気が気じゃなく、そして幸運にも間に合っていた。

予定通りの時間、予定通りの性別、予定通りの産声、全てが予定の内だがそれでも真一は驚愕と喜びが溢れていた。

「おめでとう、真一パパ。 良虎そっくりの…だと猛々しすぎて困るか、お前ソックリの女の子だ」

「ああ、ありがとう…本当に…ありがとう」

このとき、良虎が死んでから初めて真一の心中から悲しみが消え去っていた。

一時的なものだろうし、赤ん坊と接していれば思い出がまたも悲しみを募らせるだろう、だがそれでも今、真一の目から流れるのは喜びと感謝の涙だった。

もう気付いている読者も多いだろうが、良虎が取り戻そうとしていた臓器とは自分自身の子宮だった。

もつとも実践剣術家には不要であり、むしろ邪魔にすらなるそれを取り除いたのは山至示現流の後継者ならば当前だった。

だが、真一に出会い、良虎にはもつとも欲する臓器になっていた。他の子宮では代用にならず、自分の子宮でなければならなかった。

遺志を継いで子宮を手に入れてからも真一は苦労していた。良虎が生きているなら子宮を戻せば通常の出産で良い作業も、良虎が亡くなってしまうえば様々な技術的・法的ハードルがあり、それを突破するために真一はこの研究所を作ったようなものだった。

「冷凍精子と冷凍されてた子宮から取った卵子の冷たい子供だが、暖かく迎えてやれるよな？ 真一？」

「ボクはあの子に…神さまが作ったような世界は与えてやれない…だけど、ボクは…人間が人間らしく生きられる世界を…あの子に、渡してあげたい」

戦争はなくなることはないだろう。強者は更に強くなれるように強者のためのルールを作り、弱者はさらに弱くなる。

そんな理不尽なルールに抗うために弱者は戦争を引き起こし、強者も当然戦争をする。善悪もなく革命や戦争することもできなくなるということは人間が奴隷になることを意味する。

「今日も、ナチやらアメリカにマルスニウムを渡さない口実を作らなきゃな、あの子の為にも」

「そうだね…そうだね」

マルスニウムを発掘してから、真一は百兵衛をパイプ代わりにスポンサーを募り、ほぼ全ての軍事国家から資金を募った。

微量でも戦場では莫大な効果を上げる可能性があるのがマルスニウムの陰子。スポンサーにどんなに金を貰ってもマルスニウムは一切外部に渡さない、それがこの研究所の隠れたスローガンだった。

「あ、それと真一。例の潜入作業員、根来の連中つばいんだが、もう少して懐柔できそうだから…」

そのとき、研究所内に点滅灯が回り、マイクテストもなしにアナウンスが響いた。

《緊急！緊急！ マルスニウム貯蔵庫にてクーデター発生！ 手段から相手は根来系の忍者と推定されます！ 注意されたし！》

「…懐柔できそうって云ってなかったか？」

「ハッハッハー！ さあ、張り切って行くぜ。山至示現流！」

月面伊賀忍者といえど、やはり背広組ということか。

「…まあ、良いけどさ」

真一はもう一度、窓越しに我が子に視線を送り、そしてまだ視力などないはずの我が子と目が合った気がした。

蛮一文字を振るうその姿は、正に神話の英雄の如し。

断鉄というラドンを倒し、金の林檎マルスニウムを持ち帰った真一は、誰が呼んだか火星英雄ヘラクレス。

金の林檎はギリシャ神話では戦いの火種となったが、真一がマルスニウムをエサに各国に要求した内容は遠巻きながら戦火を抑えていた。

いつまで続く保障はなく、世界そのものから戦争がなくなることはない。

それでも、今日戦闘が起きなければ、その戦闘で失われるはずだった命は、今日という日を愛する人と過ごせるのだ。

ヘラクレスは戦い続ける。綱渡りのような交渉を続け、強硬手段を取る手合いには山至示現流を振るって立ち向かう。

〔火星英雄 完〕

その頃、こことは似て非なる兄弟宇宙では…！

ああー、感じるぜえー。もうひとりの俺だ…愛だとか命だとか…クズみてえなことをいうヤツを…！

その獣は静かに身体をくねらせ、次なる獲物を求めた。もうひとりの自分、正義と愛に生きる英雄を食い荒すべく、火星のベヒーモスに行く。

〈横書き用〉 火星大帝 幼少編 (前書き)

横書き版の最初です。

縦書き版とは話が繋がってません。

そのため、横書きだけ読んでも、縦書きだけ読んでもOKです。

〈横書き用〉 火星大帝 幼少編

〔き〕

錆と埃の混ざった赤い風が吹く。
入道雲まで赤い、そして雨までも鉄臭い。
夏の六カ月目、正常な気象だ。

「暑いな、オヤジ」

「いくら口で云っても良いが、ナトリウムは貴重だからな。あま
り汗はかくなよ」

“ここ”には地球と違って海がない。

そのため、塩を手に入れるには岩塩地層を発掘しなければならず、
地球とは比較にならないほど高価なものとして扱われていた。

「…辛い思いをさせるな、そろそろだ…そろそろなんだ」

まだ十歳にも満たない息子に対し、本当に申し訳なさそうに父は

云う。

父親は数日前から同じ会話をしながらも、それでもなお、自論を信じて一点を眺めつづけていた。

「腹減ったなあ……」

「もうすぐ、もうすぐなんだ……！」

食料も尽き、もう数日間は何も食べていない。
太陽光が北から回り込み、真上に来たとき、それは起きた。

「……これだ、遅真。待たせたな！ 来たぞ、マルスニウムだ！」

赤い台地に裂傷が走る。痛々しいまでに力強く、大地は割れた。
真っ赤な、ただ真っ赤な、地球から見る夕焼けのように真っ赤な
液状金属が溢れた。

「戦神^{マーズ}の加護だっ！ やったぞ遅真！ 俺たちは大金持ちだ！」

西暦2003年。

過ぎ去りし過去、過ぎ去りし近未来。

時代は第二次世界大戦から第三次世界大戦へと向う間。

場所は人種隔離政策によりナチスドイツとその同盟国のみが住ま

うことを許された惑星、火星から始まる。

〔弐〕

マルスニウム

火星でのみ取れる金属であり、

人類が認識できる金属の中で唯一、反陽子⁺つまり、陰子を内包する。

その陰子の性質なのか、生命だけが放つエネルギーであるオルゴン周波数を持つ。

陰子はその性質に謎が多く、それだけに研究価値が高い。

ハビタブルゾーン

地球・月・火星・金星と人類生活圏^{ハビタブルゾーン}ではどこでも研究されている。ただ、何に使われるかは火星開拓者にとってはどうでもいい。

とにかくどこにでも売れるということは外貨に換えやすいということである。

「逞真、お前は隠れている。重機業者の連中だ」

火星の重力は地球の約三分の一しかない。

とはいえ、さすがに人力で金属の採掘・運搬はできない。

火星開拓者は、採掘には下請けの業者を雇う。

もちろん、その下請け業者も火星を生きぬくタフさを持つ男たちであり、

油断は自身の死と、成果の略奪を意味する。

「そこで止まれっ 重機はそこで留めて降りて来い」

視認できて声は届く。

かといって近いわけでもなく、警戒できる距離だった。

「ご連絡を頂いたボーゲン運送の社長、ボーゲンです。
そちらは？ しちがしゆく 七ヶ宿さんですか？」

エイジ タダムネ シチガシユク
「鋭刃・T・七ヶ宿だ」

ボーゲンは太鼓腹に柔和な笑顔を浮かべた好々爺「こいじや」たる人物だ。
だが、それで相手への評価を歪曲させる必要はない。
悪人と善人、敵と味方に境界などありはしないのだ。

「さつさと採掘しろ、挨拶がしたくて呼んだわけじゃないんだからな」

「もちろんですとも。 ただ…まあ、この挨拶は必要でしょう？
死ぬ前に言い残すことは？」

ボーゲンに続いて重機から降りてきた男たちはボーゲンと全く同じ笑顔を浮かべ、その人数から七福神を連想させる。

ただ手に持っているのは釣竿や福袋ではなく、黒光りするリボルバーだ。

「この挨拶は要らんかもしれんが、訊いておこう、どついつ心算だ」

「これも不要でしょうが、応えておきましょう。
この荒野では殺人も違法ではない、そういうことですよ」

「…予想通りの回答だな。護身はさせてもらうが…」

鋭刃の取り出したのは、自身以上の丈をもつ包みの大きさに、ボ―ゲン運送の社員たちは覚えがあった。

「へえ、光子バズーカですかい？ それで護身する気なら…」

詳しい講釈は避けるが、光子バズーカは原理的には光さえあれば弾丸や充電の必要がない。

その性質から国籍を問わず、各国の正規軍が使っている武器だ。

「…あんたバカだ！」

火星の大気は、生身の人間が呼吸できるものではあるが、決して清らかでも澄んでもいない。

地球上でも多々ある現象だが、錆と砂が混じった赤く乾いた風に混じった錆と砂は、精密銃器に蓄えられ、その性能を狂わせる。

故に、現代を火星開拓時代と人は呼ぶ。アメリカ大陸を開拓したあのときと同じ武器を使うから。

「そいつは密閉ドーム以外ではダンベルにもならん。外ではこ
つちだろ」

ハフニウムや人工テクタイトの極超硬合金オーバータンクステンカーバイトで作られてはいるが、そのフォルムは西部劇のそれとも大差ない。

オートマチックでもないので使用者の負担も大きく、連射に向かないシングルアクション。

だが、弾丸すら貴重な時代、連射するバカは殺されるより腕が悪いとされる火星。

一発でしとめるならば、回転弾倉リボルバーの拳銃は最良の武器のひとつであつた。

「抜いて良いんですぜ？ そんな精密機器、解体して清掃しないと無理ですわ」

「使えるさ、なにせ…機械ですらないからな」

余裕の鋭刃は巻いていた布を風の如く翻し、鏡の如く磨かれ広い

鉄の表面を晒した魂。

大人がふたりで肩車をしたほどの長さ、大人の肩幅ほど有る幅、それが鋭刃の武器だった。

「でつかい刀あつ！？」

「改めて名乗らせてもらっぞ。

かせいおとめりゅう

さんじげんりゅう

火星御留流剣術、

アカムシ山到示現流…三代目当主、

エイジ鋭刃・タダムネT・シチガシユク七ヶ宿。

この刀は、蛮一文字…見てのとおり、ただ大きい日本刀、ヒトキリボーチョーだッ！」

示現流。

長い歴史の中で数多の流派に分かれたが、相手よりも巨大な刀を相手より速く振り回すという、純粋な姿勢は概ね一致している。

その強さは、江戸時代、藩の外への漏洩を恐れ、藩によって藩の内部でのみ伝承を許される御留流として制定されていたほど

「…まあ、江戸時代では強かったんでしょうがねえ…闘争はメタゲームにしてシーソーゲーム。

銃器が流行ってしまえば、そんな鉄屑、怖いわけがないでしょう？」

「怖くもないのに、どうして撃ってこないんだ？ お前らは？」

「…！」

運送会社の人間たちは気付いていた。

鋭刃が愛刀、蛮一文字を構えたその姿は、堂に入るといふ表現が合うものだった。

彼らは緊張しているのだ。

「命の取り合いは初めてか？ それなら俺から行ってやろう」

何かを鋭刃が落とした。とにかく重いものだ。

飾り気こそないが、戦国時代の甲冑に似ており、それは赤い砂を巻き上げて落ちた。

重力が地球の約3分の1しかない火星では、廃用症候群によって筋肉が衰弱していく。

防止するために多かれ少なかれ誰でもやることだが、重すぎる。

「…それ、何グラムで…？」

「地球重量で三百十二貫。地球では動けなかったが…火星ではようやく動けるようになった」

ちなみに一貫は約3,75キログラム。

3分の1とはいえ、鋭刃はそんな重量を着こなし、マルスニウム

を発掘していたらしい。

別に計算する必要も無いが、とにかくその重量はボーゲン運送の面々を戦慄させるに足る数字であるとだけ記しておこう。

「…撃て！ 無駄弾も許す！ 撃ち殺せ！」

鋭刃が疾走する。 刃が嘶く。いなな 弾丸が撥ねる。

古くから示現流では雲耀の太刀…つまり稲妻を追い抜く速度を標榜していた。

「徹甲弾ならともかく。

ストッピングパワー

ハイドランショック

対人効果重視の邪蛇毒じゃ、足も止めてやれんな」

火星に於いて完成した今、初速以外はマッハにも乗らない拳銃弾ごとき防げない道理もない。

鋭刃は自身に当たる弾丸を見極め、軌道に盾代わりの刀を置いて弾丸を防ぎ、その弾丸を余裕があれば卓球のように打ち返す。

戦国時代の刀で弾丸を受ければ折れるしかないが、壘一文字は滑り台のように幅広く、その素材にはタングステンやコバルトを添付した極超硬合金。オーバータングステンカーバイト

正に日本刀。 折れず曲がらず、そして万物を雲耀にて切り裂く。

「…で、やってくれるか？ マルスニウムの発掘」

「はい。 やります。 やらせていただきます」

そう答えたのは、ボーゲン運送の中ではボーゲンの次に太っている男。

当のボーゲンが鋭刃の小掌打ちで悶絶し、若い社員の何人かが打ち返された横弾気味の跳弾を受けて立てなくなつてからの質問だった。

「ただ、技師の何人かが負傷してしまいましたので、本社から応援を呼びたいのですが…オルゴンパックもありませんし…」

「構わん。 ただ態度次第では、雇い主の首が物理的に飛ぶことも教えておけよ」

「…忠告、痛み入ります」

だが、次に飛んだ首は、首は首でも鋭刃の右手首だった。

全く以つて唐突に、言語道断なまでに唐突に、その男は滾るマルスニウムの中から這い出してきた。

〔参〕

「…名乗っては貰えるんだろう？」

「みやもとだんてつ宮本断鉄。父は野田系の二天一流だったが、儂自身はほとんど我流だ」

儂、という一人称を使っているが、手首を刎ねた男〓断鉄は鋭刃より若い。

…ひよつとしたらまだ十代かもしれない。

両手には反りのない幅広の刀、明らかに同田貫の思想を継ぐ日本刀を抜き身で左右の手に備えている。

「なるほど。よくわかる名乗りだ。それでは次に戦う理由の説明を求めても良いか？」

「…時間稼ぎのつもりだろうが、最初から儂は邪魔する気はない。さつさと腕をくっ付けろ」

「ああ…そお…オイ、ジジイ、お前のオルゴンパックを貸せ」

先ほどから気絶していた…風に見せようとしていたボーゲンに向け、鋭刃は目もやらず断言する。

ボーゲンも反論は無駄と悟ってか、土方弁当ほどの大きさの箱を鋭刃に投げつけた。

その箱を口に銜え、くわ啗一文字を地面に付きたてて代わりに切断さ

れた右手首を拾い、傷口に押し当てた。

「…本当に良いのか、フリダシに戻して」

口に銜えたままでもぐもぐした発音になったが、意図は疑うまでもない。

火星においては、不意打ちや卑怯も実力であり、そのアドバンテージを捨てて情けを掛けるのか、そう鋭刃は訊いているのだ。

「構わん」

「…そうかい」

両者の応対に應えるように、先ほどの箱が光りだした。

これこそ、ナチスドイツの第二次世界大戦における圧勝を支えた超科学、オルゴン科生学。

一部の研究者はオーラ、プラーナ、経絡、気などと称するエネルギー工学の一派である。

操縦者の生命力だけで飛ぶオルゴンロケットは宇宙開発においては無くしてはならないエネルギーソース。

軍事転用すれば、敵国軍からオルゴンを吸って老衰に追い込み、逆に吸収したオルゴンによって自軍を癒す。

完全無公害のエネルギーは、小さな箱からエネルギーを出しきれば、切断された鋭刃の腕の再結合くらいならば可能だ。

「…で、そちらさんの目的は？　なんだ？　断鉄さんよ」

「マルスニウムの採掘をやめて帰れ、もう二度と来ない、そう約束してくれるだけでいい」

「この採掘場はお前のものではないだろう？　少なくとも俺はこの土地の使用許可を借りたぞ」

解説が必要だろう。

火星の土地に元々所有権などありはしない。

そのため、火星の大地で何かの事業をする場合、その土地自体を火星の一年単位で借りる。

その間は何を採掘しても土をどうしようと自由であり、鋭刃ももちろん使用許可を受けている。

この宮本断鉄という少年が鋭刃の前にここの使用許可を受けているとしても、今現在の占有権は鋭刃にある。

「違う。　マルスニウムは誰のものでもない、これはここに必要なんだ」

「…ここは“それはなぜ？”と訊くのが正解だろうが…やめておく」

「なら儂が訊こう、それはなぜ？」

「どんな理由だろうと、俺はお前に切り掛かるからだ。
腕を切り飛ばされ、その治療を待たれる…ム力つくぜ」

断鉄にしてみれば、ただ会話のキツカケにし、会話に応じる流れにしたかっただけなのだろう。

交渉において、自分が相手より対等以上の戦力の保有者であるアピールは欠かせない。

核を持たない国がどれだけ何を叫んでも、所詮は弱者の嘆願にすぎないように、火星にとって武力とは言語以上に重要な交渉材料だ。

「鋭刃…とか云ったか、プライドだけでは生きていけんぞ」

「プライドも無く生きてどうするんだ、断鉄さんよ」

互いに退路なし。

ボーゲン運送も…そしてそれを以前から隠れ、見守る鋭刃の子である逞真…。

傍観者となった皆の視線がふたりの剣士の三本の剣に注がれる。

「しゃ、社長…私らは…どうすれば良いんですかね？」

「今は動くな。鋭刃が勝ったら、予定通りマルスニウムを採掘する。」

あつちの二刀流の剣士が勝ったなら、云われるままに逃げ帰る…
まずは様子見だ」

多刀流の戦法は、一方の刀で攻撃を受け止め、もう一方の刀で反撃するものと思われがちだ。

しかし実際の二刀の利とは、双方の腕による連続攻撃。 防御など不要、相手が打つ前に斬ればいいのだ。

ここに、山至示現流対二天一系我流による、超攻撃的剣術の対戦となった。

「…来いよ、断鉄、さっきみたいに奇襲を掛けて来いよ」

「遠慮させてもらおう、挑発は無意味… 儂も乗らんし、鋭刃も同様、気長に殺^やろうではないか」

喋っている間、二刀の剣士、断鉄はとても奇妙な行動をしていた。まるで汚れでも落とすように両の剣を何度もぶつけ合わせている。楽器か何かと勘違いしているかのようでもある。

「おいおい、ポン刀でタッチアップしてもしようがねえだろ？」

「儂の勝手だ、邪魔したければ切り掛かってくれればいいだろう？」

「へえ…個性的な挑発…だ…ン。

なんだ…こりゃあ…？」

次の瞬間、鋭刃は自身の身に起きた変調から、断鉄のタッチアップの意味を悟った。

「ウソだろ…！？」

「気づいたときにもう遅い…卑怯と叫びたくば叫べ、断末魔として」

「…云わねえよ。この火星、負けたらなにを云っても負けなんだ。」

…だが、俺はまだ、負けちゃいねえ…！」

刀を振り上げる鋭刃に、タッチアップをやめて二刀を構える断鉄。だが、その意味は傍観者達には分らない。

運送会社の連中も、山至示現流後継者たる逞真さえも。

解説もなく、別れの挨拶もなく、剣士たちの四本足は火星の砂を踏み散らし、一点へと向う。

「…バカな…！」

その呟きは、今まで息と気配を殺していた逞真の口からはみ出ていた。

音を越える剣閃を可能とし、マッハを越えた証たるソニックブームさえも武器とするのが山至示現流。

火星では気圧等の都合で地球より幾分か音速が遅くなり、必然的にマッハ越えも容易となるが、それでも常人にできる技ではない。

だが、鋭刃が繰り出した一撃は音速を越えるどころか音速に達してもおらず、達人としてはスローモーな一撃だった。

「やっぱり…ダメか」

「そうだな」

そんな一撃で斬られるほど断鉄が遅いわけもなかった。

左刀で鋭刃の一撃を受け流し、暇のできた右刀は鋭刃の頭部を叩き割っていた。

〔肆〕

「さてと…お前らは…どうする？」

「このことを忘れられるか…？」

「もちろんです、私たちもヒマでは有りません。
あなたさまと戦ってまでマルスニウムは欲しくはありません」

「正直だな…だが、本音なんだろうが、お前たちの中の何人かは
ここを忘れられないだろう？」

自身で来なくとも、ここの情報を教えるかもしれない…気の毒
だが
」

続く言葉を待つことは、先制攻撃を断鉄に許すだけだった。

「撃ち殺せえッ！」

ボーゲンの合図とともに、ボーゲン自身も含めた七挺の拳銃の撃
鉄が鳴る。

息も揃え、拳銃の射程距離を保つべくバックステップを交える。
七人は鋭刃から受けた痛み能耐え、数で勝り、かつ刃物を相手に
するときのセオリーに忠実に応戦している。

「さすがに、七挺は止められんか」

何発かは刀の峰で受け止めたが、限界はある。

断鉄の刀は蛮一文字ほど幅広でもなく、断鉄自身は鋭刃ほど対弾
剣術^{チカン}を研究したわけでもない。
^{アン}

手首に一発受け動きが遅くなれば、次の弾丸は胴体に、さらに動きが遅くなれば首と足にミートシェイクのクレーター。

「まあ、止められないただが」

喀血しつつ、断鉄は気にもせず走り続ける。

そして社員2名にあっさりと追いつき、袈裟懸けと胴輪切りの死体の出来上がり。

「ジョーニアス！ キサブロウ！」

社員の誰かが斬られた同僚を名を呼んだが、応える人間は居るわけもなく、その声も銃声に掻き消される。

「せつかくだ、使わせてもらっぞ」

断鉄は刀を腰の鞘に収め、死んだ二人のリボルバーを拾って二挺拳銃。

弾丸充填をする直前だったらしく、左右合わせて五発しか入っていなかったらしく、すぐに弾切れを起こした。

ただまあ、五発の弾丸はそれぞれ残りの五人の五つの心臓を吹き飛ばし、断鉄は弾切れに気づきもしなかったが。

「さて…と、その少年、出てこい。 撃ち殺すぞ」

断鉄は弾切れに気づかないまま拳銃を構え、岩部に隠れた少年…
逞真を呼んだ。

逞真も気付かれていることに気付いてらしく、策もなく平然と出てきた。

「どうする、少年。 マルスニウム…そして、兄の死、忘れられるか？」

「さつき斬られたのは兄貴じゃない、若作りだけどオヤジ。

肉親つつても、負けた剣士をいつまでも覚えてるほど律儀じゃねエよ、俺は。

オヤジは拘ってたが、俺には金もどうだっていいしな、それよりも俺としてはオヤジを切り捨てたアンタの技に興味があるね」

「…ほお、二刀が珍しいか？」

喋りながら、逞真は奇妙な現象を目撃していた。

先ほどボーゲン運送の連中が撃ち、断鉄に命中した数少ない弾丸が抜け出していた。

貫通していたわけでもなく、青虫か何かが内側から押しているように肉が盛り上がり、弾丸を押し出している。

「そつちじゃない。」

決戦の時、オヤジの剣が遅くなっただろ？

超音速でもなく、あれなら俺でも殺せた。

教えてくれよ、あのとき、何をしたんだ？」

「…訊きたいのはそれだけか？」

「あ？ 他に何があるんだ？」

「儂がマルスニウムを守っている理由、

マルスニウムの価値、他にも弾丸を押し出すほどの超再生…興味はないか？」

すでに断鉄の全身に傷はなく、服にいくつか穴が残るのみ。

オルゴン治療以外にありえない現象だが、かといってオルゴン治療だとしても“肉の再生の勢いで弾丸を押し出す”なんて芸当ができるわけもない。

それができないからこそ、軟弾頭射撃はオルゴン全盛時代たる現代で主流武器として扱われているのだ。

「さつきも云っただろ？ 金はどうでもいいって。

だからマルスニウムがなんだろうと、研究する気も売る気もねえ。

再生するとしても、俺の山至示現流ならなんとでもなる。

だから、気になるのはさつき、オヤジが遅くなったトリックだ

けだ」

「…このことを他の人間に喋るか？」

「ああ？　なんでだ？　俺の前に誰か来てお前を殺されたら、やつてられねえだろ。」

「いや、お前が負けたならその勝ったヤツを殺せば…ああ、いや、やっぱりダメか、逃げられる」

「また来る気なんだな？」

「お前が見逃すならな。そうじゃないなら、今、お前を殺すだけだ」

逞真が取り出した懐刀は、鋭刃の使っていたものとは比較にもならない小振りな刃物。

「父のことを拘っていないんだろう？　それなのに僕を殺すのか？」

「下らねえ質問かしねえな、本当によ。」

理由なんざ、何でも良いんだよ。　何にしろ俺はお前を斬り殺すんだから。

説明するだけ無駄だ」

圧倒的に弱いはずの幼子の目は、火星の大気に乾いていた。

だが、乾いているからこそ潤む輝きがある

逞真は乾いた風の中、その風と太陽を受け、ヒマワリのような成長を予感させた。

「…モンゴロイドに見えるが、日本人か？」

「もつと脳髓に下る質問は無いのか？ 下らねえを通り越して上がっちゃうぜ。」

日本人だからな、黄色人種だ」

「クフ、なるほど。確かに人種を気にするなんてのは下らない、下らないな…」

…お前のような子供でもわかっていることを…どうして…あの連中はわからないんだろっな…」

断鉄は、自嘲気味に空を見上げた。

火星の薄い大気の間には、青い惑星が朝でも太陽光を反射して輝いている。

地球、人類の永遠の祖国にして、もつとも目を逸らしたくなる事実が山積しながらも、つい見てしまう星。

「…名前を聞いていいか？ 少なくとも儂：宮本断鉄は、名前を大事にしたいのだ」

「しちがしゆくたくま
七ヶ宿逞真。

七つの宿と書いてシチガシユク、たくま逞しい真、マコトで逞真だ」

「逞真か。 悪くない名前だ。

あと40時間ほどでマルスニウムが沈下する、儂はそのときに一緒に潜って火星の地下を流れる。

…火星年に一度、686日に一度、この火星で最も暑い日…またここに儂は湧き出る…戦いたくなかったらまた来い」

断鉄はどうしてマルスニウムと一緒に流れているのか。

そもそもどのようにしてマルスニウムの中で生存しているのか。

そして断鉄の使った鋭刃を倒した術の正体とは。

謎は尽きないが、逞真はそんな下らない質問をしたりはしない。

「…686日じゃオヤジを超えられねえな、あと何年か待ってる。
山到示現流を發展させて、テメエを殺しに来る、それまで心臓止めんじゃねーぞ」

逞真は知っている。

相手に質問することは、“答え”に自分の限界だけでなく、相手の限界まで内包してしまう。

だから訊ねない、知りたいことは自分の足と腕、耳と目を使って

知るべきなのだ。

「覚えておこう、では僕はマルスニウムの中で休む。
逞真よ、お前も呼吸し続けるよ、僕を殺すまで……な」

断鉄はプールにでも飛び込むように、それがさも当たり前であるかのように。

液体金属、マルスニウムの中に飛び込んだ。

沈んでから数分は逞真も見えていたが呼吸の気泡もない。

これで自殺したということもないだろうし、ここに長居するほどの余裕は逞真にはない。

「じゃあな、断鉄よ、また来るぞ」

聞こえたかどうか分からないが、とにかく挨拶をし、逞真は荒野離れるための方法を考え出した。

火星開拓時代といっても、その全土に人が住んでいるわけではない。

ここは未開発の地区であり、だからこそ液体金属の鉱山などが残されている、来るときはレンタルの火星用キャンピングカーで来た。最も近い居住区でも、車で何時間と掛かる距離がある。

「……やっぱりな」

予想はしていたが、乗ってきたキャンピングカーは操作にロックが掛かっている。

そもそも、低重力で走るために火星用車は地球のものとは比較にならないほど操作が複雑。

ロックがなかったとしても逞真は運転できる気はしなかった。

ボーゲン社の連中が乗ってきた重機にいたっては、確認する気もしない。

「…待ってくれ…ボウヤ…！」

切り伏せられ、狙撃されたはずの死体、その内のひとつが喋った。声の主を探せば一番の肥満体の社長、ボーゲンだった。

「なんだ、心臓に弾丸貫つたんじゃねーのか？」

「社長が死ぬわけにもいかないからね…。」

私は…防弾インナーを着込んでいるんだよ、他の社員には秘密だよ」

典型的な自分至上主義者らしい。

善悪は別として、中々火星的発想だ。

「で、何だ？」

「重機にある無線を使えば助けが呼べるんだが…。

弾丸の衝撃と、君のお父さんに受けた一撃で体が動かない、連れて行ってくれないかい？」

痛みと暑さに油汗を流しつつ、ボーゲンは渾身の笑顔を浮かべながら懇願していた。

その姿は…なんというか、例えられる方に失礼かもしれないが、死にかけのブタか何かのようだ。

「イヤだ」

「…は？ イヤイヤイヤ、助けを呼ばなければ君も暑さで死んでしまうよ？」

死にたいわけじゃ…は！？ まさかお父さんの後を追いたいのかな？

そんなことはお父さんも望んでいない！ 君は生きねばならない！ お父さんの分も！

そのために！ さあ！ そのために！ 私を無線のところに！」

「死ぬ気はねえよ。

俺は生き延びるために、お前やお前の部下を信用しない」

「ちょ、いや、え！？」

「そうだろう？」

助けを呼んだら、俺を生かしておくメリットがお前たちには無くなる。

今の俺じゃ、銃を持った大人を何人が相手にするより、“弁当”を持って荒野を歩いた方が簡単そうだ」

逞真は少年だ。

少年といっても大人に近い少年ではなく、幼児に近い少年だった。だが、その逞真は、父である鋭刃以上に冷たく、荒野を生きる男の目をしていた。

火星生まれの逞真は、年齢を数える習慣が無い。

なぜならば、365日で公転し一歳と数える地球年齢、700日で公転し一歳とする火星年齢。

紛らわしいし、面倒だし、荒野で生きる男に年齢は言い訳にもならない。

「頼む！ 誓約書を書いてもいい！ 君の要求はなんでも呑む！ だから助けてくれ、置いてかないでくれ！」

ボーゲンも必死になってきた。

社長たちから連絡がなければ、温もりの有る会社なら探しに来るだろう。

だが、こんなボーゲンが社長をやっている会社である。

連絡もなく社長が行方不明になれば、残った重機や店舗を売るなり持ち逃げされるのがオチというものだ。

それをボーゲン自身もわかってる。 だからこそ必死なのだ。

「ああ？ 置いてくわけねえだろ。

他の連中は弾丸を受けたり、身体を切断されたりしてどうしようもないがな。

アンタは無傷に近いわけだし、連れてくよ」

「ほ、本当か！？ 連れて行ってくれるのか！？」

火星では重力が3分の1。

加えて逞真も山至示現流のために鍛えてもいるだろうし、ボーゲンの体格でも台車か何か有れば運べるだろう。

「ああ、切り殺された方は、出血が多すぎて“弁当”にはならねえし…。」

最近のハイドラショックは劣化ウランを添加してあるんだろ？ 放射能汚染された心臓なんて、“弁当”にはしたくねえ」

「…？ 待て待て待て。 何の話を…しているのかな？」

「だから、“弁当”の話だよ。

一日じゃ町まで着かねえし、弁当は絶対必要だ。

オヤジが持参してた食料はもう尽きてたからな、俺はもう腹減ってんだよ」

そろそろ、ボーゲンも理解してきた。

いや、この理解が間違っていることを祈ってすらいるのだが。

「オッサン、生け締めって知ってるか？

日本で魚とかを捌くときに使う手法なんだが…。

生きたまま運んで衰弱させるより、元気な内に殺した方が美味しい料理になるんだよ」

「いや、弁当なら…重機に常設のものが…！」

「もうみつけたよ、でも、あれじゃ足りねえな。俺の胃袋はあんなの十倍はあるんだ」

二時間後、ボーゲン運送の重機に常設されていた非常食を平らげ、逞真の腹は満ちた。

荷物は、集められるだけの塩を溶いた水、父の形見の極超硬合金日本刀の蛮アカムシ一文字、

そして、さっきまではうるさく喚いていた“調理”を終えた弁当一個。

墓を作りもせず、銃や無線、現金やクレジットカードは置き去りに、逞真は荒野を歩き出した。

〈横書き用〉 火星大帝 青年編（前書き）

横書き版その2、少年編からどうぞ。

〔巻〕

例えば、地球でも水中では体が浮くが、空気中では浮かない。

それは圧力のせいなのだが、この火星ドームでは気圧の制御によって地球とほぼ同じだけの体感重力に調整してある。

ドームの種類には細かく区分でき、これにも多々問題点があるが、今は対峙するふたりの男に話を向けよう。

「抜け、日本人…刀相手に先に撃つたとあつては、この名に傷が付く…」

「下らねえ、下らねえな。」

名の傷より先に、これから裂かれる胴体のことを心配しろよ」

片方はガンベルトに拳銃を何十丁と備えることで防弾チョッキ代わりにしたガンマン。

もう片方は自身より長く太い日本刀を鞘に入れたまま担いだソードマン。

こんな決闘まがいなことは火星ドームでは珍しくもなく、野次馬も集まらない。

それどころか、慣れすぎて巻き添えに合わない為に店から出てこようともせず、視界の中には当事者ふたりだけ。

「謝れば…許してやらんこともないんだぞ…？」

「ワリイな。 殺りあつてる理由なんざとつくに忘れてんだ。
覚えてもないことを謝れるわけないだろうが」

ガンマンの右手に怒りと力が充填される。

シンプルで安全装置もなく、構えて狙って撃てば、他の銃器よりも的確に素早く、対象となる個人の命を奪える。

リボルバー式拳銃が突撃銃やオートマチック拳銃に勝る最大の点はそれだろう。

「抜け！ 刀を抜け！ 構えろ！」

「下らねえ、断るつつてんだろ」

「抜け！ 抜けエツ！」

「だから、テメエが先だつて…」

「ほら！ 抜け！ そら抜け！ さあああっ！」

「…ああ、もういいや。めんどくせえ…。
抜くからなあ…‥‥‥ゼンシャアア…ッッ！」

ソードマンは猿か何かのような奇声を上げ、一呼吸の間に例の大
刀を抜き、構えて見せた。

「抜いたぞ。撃てよ。」

えーっと…なんつつたかな…名前も忘れちゃったが、ガンマン
よお」

だが、ガンマンからの罵声も名乗りも弾丸も飛んでこない。
周囲の家の壁や道には亀裂が入り、その亀裂はまっすぐにガンマ
ンの体まで伸びている。

亀裂はガンマンの肉体を爆砕し、もちろん落命済み。

「だから先に銃を抜け、つつつたろうがよお…。」

山至示現流、猿叫大衝撃波…俺のオリジナルだけどな。
えんきようたいたいしゅうげきは

抜刀時に剣先が超音速に達するのが俺の山至示現流ッ！

音速を超えた際に発生するソニックブームを猿叫で操作！

その衝撃で敵を斬る…って、だから聞いてつかア、ガンマン？」

猿叫とは、地球示現流にある気合を込めた叫び声で相手の威勢を
挫く技。

そもそも音より早いソニックブームを、どうやって声という音で干渉しているのか？

よしんばソニックブームに干渉できたとして、声ぐらいの音波で人間を殺傷するほどのエネルギーを制御できるのか？

おそらく、この四代目山至示現流当主、七ヶ宿逞真も何かを勘違いした上で使っている。

「……ドーム重力中での弾丸を跳ね返す練習がしたかったんだぜえ……？」

あっさりと死んでんじゃねーよ！ ソニックブームぐらい^{かわ}躲せッ、ボケがッ！

それで反撃に弾丸の10発や20発は撃てやッ！ 聞いているのかッ！？ オイツ！」

答えない死体に唾を吐く勢いでまくし立ててから、彼は食堂へと足を向けた。

かつて、父を殺され、手を血で染めながら荒野から逞真が生還してから既に火星は5週の公転をしていた。

火星年で5年、地球年でほぼ10年。

亡き父の愛刀、蛮一文字を使いこなせるほどに、逞真は技術的にも肉体的にも成長していた。

凶暴に、豪快に、獰猛に。

〔弐〕

「店主ッ！ 無菌ゴキブリのカツ丼、メガ盛りひとつ」

砂で故障中の自動ドアを押し開けて、逞真はいつものカウンター席に腰掛け、食いなれたメニューを注文する。

一連の作業は、ここ数ヶ月の毎日毎食、固定的な作業だった。

「逞真くん、今日も助かったよ」

「あ？ 何がよ？」

名前も知らない顔見知りの女店長、若いながらにキズだらけの腕は火星人のそれだ。

逞真は血液は既に胃袋に向っており、頭には一滴も血が行っていないんじゃないだろうか。

「さっきの客だよ。」

銃を抜けばタダメシが食えると思ってるヤツが多くて困るからね。

正当防衛で片付けてくれるから、ホントに助かるよ」

「…あー、そっぴゃあ…そんな理由だったか」

逞真も思い出してきた。

さっきのガンマンは、この店の客だった。

それが食べ終わってから定食にゴキブリだかカマドウマだかの足が入っていたと騒いだ。

で、それに逞真が挑発にしか聞こえない仲裁に入り、銃を抜く事態になった。

そこからは、『表に出ろ！』『望むところだ！』『猿叫大衝撃波』と、先ほどに繋がる。

「代金は死体から回収するし、逞真くんもジャンジャン食べてね！
なんなら、逞真くん、オルゴンパックやる？

なんかね本国がアメリカ・ソビエト連合軍に大打撃を与えたとかで、それで安く流れてきたんだよ」

オルゴンパックは、生命から吸収・採集する。

そのため、ナチスドイツ軍が敵軍を破れば破るほど、安値で流通する。

つまり、ここに流れてきているオルゴンパックに注入されているオルゴンエネルギーは…そういうことだ。

「要らねえ。胃袋を通さないメシは病院食だけで十分だ」

「…その理由も珍しいねえ、逞真くん。

普通は戦死者から吸ったのは精神衛生上イヤ、とかだけど…

ホラ、これ、摂取するとき、気持ちいいんだよ？ オルグアアア〜ズム、的な」

「そんなものを奢ってくれる気があるなら、ゴキカツ丼を二杯にしてくれ」

「いやあー、カツコイイねえ。」

逞真くんも独日連合軍に志願とかしない？

本国はなんか、火星でマルスニウムの採掘とかしてるらしいし、その現地募集とかしてるよ？」

「そんな下らないことを喋ってんなら、さつさとゴキカツ…。」

…マルスニウムの採掘？」

胃袋に行っていた血液の3割ほどが逞真の脳に戻ってきた。

お気に入りの客が珍しく話題に興味をもったことが嬉しいらしく、女店長は情報を思い出そうとする所作をする。

「うんうん！　なんかね、火星ってプレートとかないから地震も起きないじゃない？」

その関係で、毎年同じ場所にマルスニウムっていう液体金属が噴出すんだって。

それを去年から突き止めてたんだけど、去年は二刀流のテロリストに阻止されたとかで…って、え、どうしたの！？」

「さつさとメシを持って来い！　塩水もだ！　すぐに出る！」

どう考えても、二刀流テロリストの居るマルスニウム鉱脈が他に有るわけもない。

ノンビリと修行している間に、時代が追いついてしまった。

「つちいつ！ 断鉄！ 生きてろよォ？」

お前がナチスドイツに殺されたら、今度はナチスドイツにケンを売ること……」

呟いてから逞真は思った。

それはそれで楽しそうだと。

逞真が断鉄を倒そうとするのは、強さの証明、売名、ましてや親の仇討ちなどでもない。

そんな高尚な二次的な目的は存在しないのだ。

ただ強いやつが居ればそれを斬り殺す、それが目的であり手段であり、ゴールなのだ。

本来、火星の弱い重力でなければ超音速に達しないとされていた山至示現流の限界を超え、

地球重力のドーム内でもソニックブームを使えるようになった四代目。

彼の名は七ヶ宿逞真。 今日悩まず、考えず、恥じず荒野を走る。

〔参〕

火星静止軌道上、ナチスドイツの誇るオルゴンスペースシップ、ツェットヒトラー。

搭載された超兵器の数々は、小国をダース単位で焼き尽くし、敵軍からオルゴンを吸収することで半永久的飛行能力を持つ。

「…では、ABC兵器はどうだ？ 特別に条約を無視してもいい」

「A…アトミック兵器は陰子を含むマルスニウムの近くでは起動しません。」

B…バイオ兵器も危険です。マルスニウムの中放つ超オルゴンで成長し、オルゴンバイオハザードもあります。

C…ケミカル兵器はオルゴン治療で癒され、無力化されています」

「それでは、テルミットナパームは？」

「先ほどのエアロジェットミサイルと同じです。」

爆発系の兵器では、あの恐るべき二刀流アナーキストの筋力ならば、爆発する寸前にマルスニウムの中に飛び込むだけです。

かといって、マルスニウムを吹き飛ばすほどの爆発力を使つては本末転倒」

「ならば、光子加速ビームはッ!？」

「あれは宇宙空間でのみ使えるのです。

火星の気は不純物が多すぎます。

どんなに光を収束させても、空中で散逸して人間を殺傷する威力にはなりません」

「ならば、アレや…コレは？

いやいや、それならば…あの民主主義的アナーキストの黄猿を始末するには、どうすればいいのだっ！？」

「最良の方法は、今やっている方法ですよ。

すなわち、鍛え抜かれた人間による白兵戦によって、オルゴンで瞬間的に再生できないほどの物理的損壊を与えるのみ」

「…わが帝国の…超科学が…あんな人間ひとりにッ！？」

ナチスドイツの最強にして最狂の戦艦。

今は二刀流の剣士と火星という大地に対し、ただ兵士を運搬するだけの台車になりさがっていた。

死屍累々、死体によるジグソーパズルを大量作成した二刀剣士は周囲を見渡した。

「儂の名は二天一系我流、姓は宮本、名を断鉄ッ。
名乗れッ、勇者たち」

断鉄の名乗り、生残っているただ2名の兵士も武器をしまい、肺一杯に空気を吸い込み、口上を思い出す。

「…生まれは満月の鰐つばがく隠れクレーター。
伊賀忍者、姓を下柘植しもつげ、名を百兵衛ひゃくへえ」

「自分はナチスドイツ軍、金星方面星間軍第7師団所属、ドロウ・レオパルド少佐。」

ドイツ式システマ及び、テコンドーと極真空手を少々」

最初は3桁を越える人数が居た兵士たちも格段に減り、残っているのは強い順にふたりだけ。

共に一騎当千を謳われ、独力での大量虐殺を可能とする戦士だったが、それも今や内臓破裂や手足を失って満身創痍。
ホロコースト

戦闘中に仲間たちにオルゴンパックを使い、自身を癒す分など残してはいない。

「殺すには惜しい、ふたりとも国のためなんか死ぬな。」

特にそっちの忍者は日本人…母国ですらない同盟国だろう、死ぬことはない」

「…気持ちはうれしいがね…国のためじゃない。
家族を敵前逃亡した男の息子や嫁、そう呼ばせるわけにはいかんだろう」

「自分も同感であります」

月面忍者の呟きに、金星軍人もうなずいた。

誇りだけでもない、その汚名は一生付いて回り、そのまま家族の子孫にまで及ぶ。

七十五日どころではなく、下手をすれば七代先まで続くかもしれない。

「トラウム・ヒトラーの野郎は嫌いだよ、嫌いだが…それでも踊るしかないんだ」

「…自分も同感であります」

最初から分かっていた。言語的アプローチでいちいち解決しないから刀を使う。

神が創ったはずのこの世界は、悪魔が造ったとは思えないほど残酷で無情で悪魔的に美しい。

「…余計な言葉を挟んで、悪かった」

「いや、これもワビサビ…じゃあ、始めようぜ？」

月面忍者の手裏剣が飛ぶ、金星軍人の鉄拳とナイフが風を切る、火星二刀剣士が大地を蹴る。

恨みなき戦いは、瞬きの間に数多の激突を繰り広げ、金星軍人と月面忍者のコンビネーションが優位に立った。

「…っちい!？」

金星軍人の両目が怪しく、それでいてメタリックに光る。

ドイツ人にしては珍しい黒目だったが、それもそのはず。それは義眼、だから生来の色ではない。

それどころか耐熱性を上げるために黒くしている。

光は火星の大気で拡散されながらも、火星剣士の両腕を焼き切っていた。

「これで詰みだあッ」

オルゴンで治癒しようとする火星剣士の両肩の傷口を、月面忍者が後ろから抱きかかえるようにして押さえつける。

止血しようとしているわけではない、物理的に圧迫することで、傷の修復を防いでいるのだ。

「今だ、レオパルド少佐ッ！ コイツの頭を叩き潰せ！
脳さえ全壊させれば、オルゴンでも治せねえッ！」

「任せ…又う？」

音より速く地平線から飛来した“それ”は、金星軍人の身体を下に切断した。

状況を把握できていない金星軍人は、ソニックブームから一瞬遅れて届いた『猿叫大衝撃波ッ！』という言葉聞き、事切れた。

「なんだあつ、断鉄つ、仲間がいるのか、お前には…ッ！」

背に太陽を背負い、地平線からやってくる。

砂塵さじんを巻き上げ、赤いマントに同色の砂を付着させ、蛮一文字を担いでフォーミュラーカー並のスピードを出すひとりの人間。

断鉄は、その刀と放つオルゴン周波数に覚えがあった。

「いや…仲間ではないな…最大の敵だ」

打つ手が尽きたと思った月面忍者の百兵衛だったが、空中から落ちてくる何かに気が付いた。

テルミットナパーム弾、その威力は半径10〜30メートル以内の物体を灰も残さず焼き尽くす。

百兵衛には、静止軌道上の司令部が何を考えているのかはすぐ分かった。

このまま断鉄を抑え、道連れにして死ね…そう云っているのだ。

「運が悪いな断鉄。」

…仲間も大層なスピードだが、あの爆弾が落ちてくる方が早い」

「百兵衛：今儂を放せば、楽にお前も逃げられる。」

国に見離されたんだぞ、ヤツらは儂と一緒に前も殺す気だ」

もう言葉もない、ただ放さない。断鉄の腕を押さえつけ、再生させないだけ。

断鉄ももがくが、一層百兵衛の閉める力が強くなるだけ。

「…そうか、わかった」

断鉄は覚悟を決めたように、頭頂部が地面につくほどに柔軟に前屈したが、百兵衛も離さずに捕縛し続ける。

だが、同じような身長の方の男が密着した状態で前屈すれば、必然的に後ろの人間の足は浮く。

「っせいいッ！」

掛け声と共に、断鉄は百兵衛を乗せたまま跳んだ。

足さえ付いていれば、百兵衛も筋力と体重移動で粘れただろう。

だが、足が浮いてしまっただけは掛けられる力は僅かな体重だけ。

跳んだ断鉄たちの落下予測地点は、マルスニウムの噴出口だ。

「アウウオをおオーーッ!?」

叫ぶんじゃなくて息を吸うんだよ…そう云おうかとも思っただったが、言葉を発するだけの酸素が惜しかった。

そして、百兵衛を付けたまま、断鉄はマルスニウムの中に飛び込んだ。

〔肆〕

「よお、久しぶり」

マルスニウムから這い上がった断鉄を迎えたのは、云うまでもなく遅真だった。

断鉄にはもちろん腕が生えており、その腰には二本の刀が挿してある。

「七ヶ宿遅真…だったな。
待っていたのか。」

「いや、ずっと走ってたからな、さつき着いた」

液体金属マルスニウムに飛び込んでからは、断鉄と百兵衛は当然呼吸できなかった。

そこからは根比べ、どっちの息が先に尽きるか。

だが、一方は呼吸を整えて潜る直前に肺に空気を蓄えた断鉄、一方は断鉄を締めつけて酸素を損耗し続ける百兵衛。

先に息が尽きるのは百兵衛なのは自明、百兵衛が窒息死後、死後硬直が始まる前に断鉄は脱出し、今に至る。

「凄い男だった。あの状態で息が…15分以上続くとは思っててもなかった。」

「死んだヤツには興味ねえよ。」

お前の刀はさっきのナパームで溶けちゃったが、問題ないよな？
」

逞真は視線を断鉄の腰、父親と来たときと変わらず下がっている刀を見ながら云った。

「問題ない、マルスニウムの陰子で刀の陽子・中性子の情報をコピーして…と、下らない解説だったな」

成長しても逞真は興味のない話題は『下らない』と一言でバツサリするだろうと、なんとなく断鉄は予想していた。

「わかってるじゃないか、さあ、さっさと斬り合おうぜ?」

軽い足取りで逞真は下がった。

帰るためではない、斬りあうための距離だ。

「…別に、クロスレンジから始めてもいいんだが?」

「てめえのトリックは距離が離れてることが前提だろ? 離れてやるよ。」

せつかく、トリック破りを開発したんだ、使わないともったいねえ」

互いの相貌は、ただ緩む。

これからどちらかが死ぬというのに口元が緩み、目じりが下がる。等価値の命を捨て形無きモノを得るために、四本の腕と三本の刀、二つの魂は一つの勝負へと集約される。

「…本当に気楽だ、儂と逞真、ただ互いの命を掛けただけの戦いか。」

国もマルスニウムも民族も人種もなく、ただ剣と剣の技比べ…最高の気晴らしだ、死んでも恨むなよ?」

「死んだら残るものなんてありはしねえ、恨めるわけねえだろ。」

火星御留流、山至示現流：四代目、七ヶ宿逞真ッ！」

「二天一系我流、宮本断鉄ッ！」

『参るッ！』

〔伍〕

断鉄が抜き身の刀を打ち鳴らす。

鋭刃にやったときと同じようにタッチアップだ。

だが、それはただのタッチアップではないことを逞真は既に察している。

「（それを受けてやるわけには、いかねえんだよおッ）」

逞真はその場を動かず、蛭一文字を思いっきり空振りする。

さながらメジャーリーグの四番バッター、ファールにもならない大三振。

だが、その一振りは刀を寝かせた状態で振られていた。

すなわち、幅広の蛭一文字はさながら大きな団扇うちわのようになり、疾風を巻き起こしていた。

疾風とは疾病を引き起こす風。　今、逞真の放った風は正に疾風だった。

風を受けた断鉄は風に含まれた病の元、中性子に気と血を吐いた。

「（そう来たか、逞真！）」

「（当たり前だろうがぁ、断鉄ッ！）」

断鉄の刀には、発見したキュリー婦人を蝕み殺したものとして有名な放射性金属、ポロニウムが使われている。

通常、1000レムほどの被爆で死に至るとされる放射能だが、断鉄がタッチアップによって刀を削り、一度に放つ放射能は3000レムを超える。

その破壊力は浴びた瞬間に体調不良は確定、鋭刃はこれを浴びて敗北した。

恐ろしいことに、断鉄はこの双剣を削る角度を達人的感覚でナノセンチ単位調整することで、放射能に指向性を持たせ、相手にだけ中性子を向けていた。

だがしかし、放射能の肝である中性子は大気に干渉するため、風に弱い。

逞真はその特性を利用し突風によって断鉄に中性子を跳ね返していた。

「ゼエッ、ツシャアアーウィイイッッ！」

逞真の猿叫大衝撃波が、被爆してグロッキーな断鉄へと向かう。
近距離でソニックブームを受ければ回避は不可能。

マイクロ秒単位の静寂の中、断鉄は刀でのブロックを選んだ。
といつても、実体も無い衝撃波であり、刀で受けたぐらいでは防げない。

だから、断鉄は右腕と右刀を顔を隠すカーテンの代わりにした。

「（それは考えてなかったぜ、断鉄）」

「（甘い、青いなあ）」

衝撃波は、断鉄の胴体を打ち付け、骨格を薄氷のように砕いた。
だが、右腕と右刀でかばった顔面及び脳のダメージは深刻だが、
即死するほどではない。

むしろ、右刀を砕かれた際、それを利用してさえた。
刀が砕かれる際、断鉄はその砕かれる角度を微調整し、逞真へ多
量の中性子を叩き付けている。

互いに喀血し、肌が赤みを失い、呼吸が荒くなる。

だが、断鉄の肉体はゆつくりとだが、確かに癒えていく。

全身骨折、多量出血、超致死量被爆と、ナチスドイツの最新鋭オ
ルゴン治療でも不可能なはずだった。

それでも断鉄のダメージは癒えていた。

早回しの巻き戻し動画のように整形されていく。

「さあーせえーるウかあ…ムオツ！」

幽鬼のごとく……いや、こんなに力強い幽鬼が居てたまるか。
口と鼻は壊れた血液専用水道管、溢れ出る血を拭いてもせず、逞真は立ち上がる。

断鉄に完治されたら勝ち目が無くなる、猿叫大衝撃波の効果が有る内に叩かなければならない。

「燃えるなあ……感涙に閑無し」

断鉄の頬を流れるものは、脳挫傷の出血による血涙なので止まるわけも無いのだが。

とにかく、ふたりは満身創痍に鞭を打ち、勝利という飴のため、一本の刀を両手で握る。

「……山至示現流……奥義イ、開闢蜻蛉翔……ッ！」

示現流の代表的剣術のひとつ、蜻蛉。とんぼ

やはり流派ごとに詳細は異なるが、上段から振り下ろす一撃必殺の構えのことを指す場合が多い。

この山至示現流の開闢蜻蛉翔は、正中線の延長に置くように額の前で両手を使って刀を支える。

このあとの攻撃はただひとつ、振り下ろす。

互いに、自分が叫んでいることに気が付いていなかった。
相手とシンクロし、剣と剣を震わせ、咆哮が重なり、戦神の星に

轟く。

蛮一文字が振り下ろされる。

その剣先は火星気圧下でのマッハ数は超音速すら超え、『極超音速』と云うに相応しい数値を記録していた。

大気との摩擦熱が逞真の腕を燃やす、摩擦の振動が逞真の放射能で汚染された臓器を揺らす。

「…ッ！」

だが、炎を巻き上げるほどの極超音速がいけなかった。

炎はふたりを遮る目隠しとなり、刹那：よりもさらに細かい時間、逞真の視界から断鉄を隠した。

開闢蜻蛉翔が炸裂する寸前、断鉄は刃の表面を滑らせ、奥義を受け流していた。

「流あアツ！」

合わない歯車、二本の刀の生み出した壮烈な衝撃は、受けた断鉄の腕から入り、足から抜けて大地を貫く。

その速さ雲耀、稲妻のように。

衝撃は痛みを生むが、その痛みが去るのもまた雲耀。

「…！」

蜜一文字の切っ先が火星の大地に突き立つと同時に、断鉄の刀は逞真の頭部への軌道を描いている。

逞真も蜜一文字を振り上げているが、大地に半ば以上埋まった刀が間に合う道理も無い。

そして、断鉄の刀は逞真の頭に直撃した。

「…あ？」

「しまっ…」

両者、この戦いが始まって以来、唯一動きを止めた一瞬だった。

碎けた。

逞真の頭蓋骨を砕くはずだった断鉄の刀が逆に折れた。

断鉄の刀が完全に折れた。

先ほど逞真の開闢蜻蛉翔を受け流したとき、摩擦と振動で目には見えないヒビが入っていた。

それでも、腐ってもオーバートングステンカーバイト、極超硬合金である、人類の英知である。

人間の頭蓋骨より脆いはずはない、並の人間の頭蓋骨ならば潰せていた。

だが、逞真の頭蓋骨は人類では考えられないほどの強度を持っていた。

カルシウムに似る構造をした放射性元素のストロンチウムで汚染されたゴキカツを常食とした逞真の骨格は天然極超硬合金だった。

「…悪食あくじきに負けるとは思わなかったなッ…！」

「オギヤーから棺桶まで食わず嫌いなしッ！、日頃の行いの賜物ッ、つつーことだッ！」

振り上げられた蛮一文字は、名前も付けるに値しない、ただ振っただけで、断鉄の身体を両断していた。

脳の損傷でも軽度ならばオルゴンで治療できるが、それは『生物的矛盾』が生じない範疇に限られる。

つまるところ、肉体を真ん中で両断した状態で再生できるとすれば、ひとりがふたりになる。

個人とはひとりであるからこそ個人なのであって、完全であればあるほどコピーに用はない。

すなわち、俗に云う物理的エイリアス問題が発生するが…簡単に云えば、次なる逞真の雄叫びに集約される。

「この勝負、この俺の勝ちだッ！」

勝関^{かちどき}を上げる逞真だが、その肉体の限界は近い。

人間の垢は可燃性であり、身体を洗うという概念もない逞真は松明^{まつ}のように燃える。

極超音速を使った代償、摩擦熱は消える気配もない。

被爆、脱水症状、失血多量、内臓破裂、極超音速時の衝撃で両鎖骨完全骨折…その他諸々。

「…ああ、つうつア…！」

肩まで燃え広がった炎により、息を吸うだけで気管支が炙られる。それでも逞真は命を諦めない、炎を消すべくマルスニウムへと歩を進める。

ナパーム弾の熱を受けて発火しない以上、マルスニウムは発火性はない。

マルスニウムの泉の淵まで来たときには、既に逞真はその泉に倒れこむ以外の体力はなかった。

〈横書き用〉 火星大帝 悪食編

〔巻〕

目が覚めたか、七ヶ宿逞真

逞真が目覚めたとき、彼は全く状況を把握できなかった。
上下も左右もわからず赤く光る空間、短い手足…鋭刃が死んだ頃に等しい手足の長さだ。

「…いや、寝直すわ」

待てッ！ 二度寝するなッ！ そこは質問しろ！ 『ここはどこだ？』とか『俺は死んだのか？』とかッ！

「下らねえ、質問したところで状況が変わるわけもねえ。
だったら今は寝たいから寝る」

刹那主義者めッ！ 空間がいきなり喋ったら驚け！ まず驚け！

「うるせえなあ…俺に命令するんじゃないやねえよ、下らねえ」

寝かせん！ 説明を聞くまで寝かせん！ まず聞け！ 私はマルスニウムだ！

「勝手に喋れ、俺は寝る」

私たちマルスニウムは液状金属生命体だ！ 疑問に思っていただろう！？ なぜ金属がオルゴンを放つか、どうして断鉄の傷が癒えたかッ！

「気にするだけ無駄だろうが」

無視するのも面倒くさい、そんな様子で逞真は上下左右も無い空間で寝返りひとつ。

この男、完全に順応している。

気にしろオツ！ マルスニウムは陰子ポテンシャルを持っていて、陽子である“魂”を引っ張る！ その際に発生する

「ああ、いい感じに意味分からねえ、眠くなってきたぜ」

だあああッ！ つまり！ マルスニウムは魂を蓄積する天国であり地獄でもある！ そしてお前は死んだ、OK！？

「んー、多分」

自分が死んだと聞かされても、態度が動かない。

ウソだと思っっているわけでも理解していないわけでもない、ただ気にしていないだけだ。

生き返りたくはないかッ！？ 話を聞け！

「…いや、別に。 えーっと…名前を忘れたが、あの二刀流野郎にも勝ったしな。

敵を探して戦うのも面倒だしな」

逞真は、生まれながらに父である鋭刃を超えるべき敵として想定していた。

その父の死がそのまま断鉄という敵を形成することで連鎖していたが、自分が断鉄を殺したことで連鎖が切れた。

復讐の連鎖という言葉があるが、それこそが逞真の求めるものだったのかもしれない。

「ダメですよ、マルスニウム。

こいつに命令したいなら、率直にやって欲しいことを云った方がいい」

どこからともなく、本当にどこからともなく、赤い空間に出現していた男は、七ヶ宿鋭刃だった。

死んだはずの父を前にしても、逞真はさして興味を示していないが。

断鉄にさえ負けた男に、今更何を期待しようと思つのか。

「逞真、この陽子宇宙の“敵”が居る。

近所の陽子宇宙を破壊し続けている“敵”が来る。

マルスニウムの計算では人類の科学力が奇跡的進歩や発見をしても、到底勝てないらしい。

その敵を倒さなければ、地球も火星も、この銀河の生命は全滅だ」

唐突に大きくなった話だが、その辺りになってやっと逞真は完全に食いついていた。

「…父さん、俺が話を聞けばその“敵”と戦えるのか？」

「分からない。

生物は、巨視的マクロにも微視的ミクロにも、生きているというだけで量子を放ち、宇宙を飛び回る。

それは陽子的特長を持ち、最終的に銀河内で唯一陰子的性質を持つマルスニウムの中に蓄積される。

ゆえに、このマルスニウムは生命が繁栄と絶滅を繰り返すたびに、多くの情報量子を集める」

このマルスニウムは天国であり地獄だ。その“敵”が来るまでに大量の魂が来れば、その魂が含有するオルゴンを束ねて戦える。だが、結局は仮定の未知数、保証はない

逞真に、断鉄と最終決戦をしたときのような笑顔が亀裂として走った。

「保証がない」…俺の好きな言葉だ。
俺もその戦いに参加できるのか？」

「参加する所じゃない、お前が戦いの指揮を執るんだ。
お前は、この太陽系銀河最強の闘争心の持ち主である断鉄を斬り殺している。

あと数万年の間に、お前以上の攻撃性を持つ生物が発生しない限り、お前が全ての魂を率いて戦うんだ」

「もう一度聞いておく。その“敵”ってのは…強いんだな？」

「強い。果てしなく強い。
リミッター
DNAという限界を付けられ、統一理論を完成できない人類では勝てない。

勝てる可能性があるのが、陰子と陽子を研究をするマルスニウムだけだ」

「…俺はなにをすればいい？」

「戦え、逞真。断鉄がそうしたように。」

マルスニウムは火星で唯一の生命として発生したせいで、闘争するという機能を獲得できなかった。

愚かと呼ばれる人類が獲得した闘争本能、全ての生命を上回る圧倒的エゴと欲望を振りかざせ、逞真ッ！」

「今すぐ、俺を立たせろ。マルスニウム」

オオ！ やってくれるか！ 全ての命のために！

「下らない質問をするな、俺のためだ。」

俺は、お前たちマルスニウムも最終的には倒す。それが目的になっただけだ」

3秒後、全身を修復された逞真が、やはり修繕された蛮一文字を振るっていた。

もちろん、敵はナチスドイツ。

断鉄が死んで安心していたところを襲われ、彼らは蹂躪されるままだった。

弾丸は剣を盾に防ぎ、超科学兵器も断鉄同様に防がれ、近接戦闘では極超音速剣術に対する方法はない。

それから火星が公転するたびに、様々な手段を用いて、数多の勇者が戦いを挑んだ。

だが、逞真は神話的にエネルギーを爆発させ、全ての敵を蛮一文字で切り裂き、噛み千切り、食い殺していった。

その姿と力に、誰かが逞真をこう呼んだ。

ヨブの記した悪食の獣になぞらえ、戦う場所に合わせ、火星大帝ベヒーモス、と。

〔終〕

西暦という暦が忘れ去られて久しい遠未来。

キリストを越えると呼ばれる聖人（真贋を問わず）が数多に出現し、果てしない宗教戦争を繰り広げた地球圏。

その戦争は人類に様々な発展と破滅を生んでいた。

「来るぞ！ ネオ合衆連邦！」

静かなる宇宙。

大気もない真空では音が発生するはずもないが、光を伝達するエーテルを震わせ、言葉が流れる。

火星と地球を中心に展開されるルナ級：すなわち、月と同等の大きさを持つ戦艦が集う大艦隊。

「ハッハッハアッ！ 小さいなア！ ヒトラー帝国軍！ 数ばかり揃えて！」

デュアルキリスト

「多重救世主共和国：ふん、ガリレオ衛星を資材にしておいて、量産も失敗したお前らと話す舌は持たん！」

「…こちら羅生門艦隊旗艦、護国大和。

ご両人、今はそんなことをやっている場合ではないだろう？
今は“敵”の相手が先でござろう？

あと17秒、決戦に備えるが道理」

国籍を越えて集結したその戦力を前に、科学によって予言された
“それ”はやってきた。

真黒の光を全天に向けて放ち、全ての星座を隠すカーテンのように、その巨体は現れたのだ。

予期していたとはいえ、そのスペックに艦隊に激震が走る。

「全長8パーセク：総エネルギー、無限大を計測だあつ！」

「無限大なのは分かってるわ、バカが！

四次元くりこみを開始しろ。何無限か、正確に計算を急げ！」

数学的に無限以上の数字を計算するための手段、“くりこみ”。

元々は机上の計算でのみ使用されていたが、現実の無限大発生と同時に発展した数学。

それなりに複雑ではあるが、生身の人間でも計測できる程度である。

量子演算による多局的演算能力を持つ、最新鋭コンピューターならば計算は造作もない。

「計測終了、敵エネルギー…53不可思議インフィニットジュール！」

「不可思議ッ！？ 10の64乗の単位じゃないかつ！」

つまるところ、10の後にゼロが64個連なる単位、ということだ。

参考までに、彼らの中で最も出力の高い戦艦、護国大和が3インフィニットジュール。

同じく無限大となる数字の戦いでありながら、その無限大のケタが途方もなく遠かった。

質量を持たず、電荷を持たず、量子ポテンシャルを持たず、虚無であるはずの“それ”は人類の科学の限界をはるかに超越していた。

ヴォォーウ

「…今の…音…？ は…？」

“虚無”は呻いた。

空気の振動でも、エーテルの震動でもない。

精神世界での震動、テレパシーとも呼ぶべき呻き声。

この場に居る戦闘員はもちろん、地球や月などの各生活圏に残って勝利を祈る人々の心にも響いていた。

それは攻撃の合図でも降伏勧告でもなく、“いただきます”、というありきたりな独り言にすぎなかった。

続き、太陽系内の“全て”の生命体に、同時に攻撃が行われた。軍人も民間人も、強いものも弱いものの、人種も国籍も問わず、同時に急激な疲労が全身を貫いた。

「なんだ、これは…オルゴン吸引現象ツツ!？」

「ありえない! この戦艦はナノスキンでいかなる電磁波も次元力も遮断する…はずなのに…ッ!」

「さっきの“声”の応用でござろう…っ!

テレパシーができるなら…そこからエネルギーを吸い取ること…不可能ではないかもしれん…!」

この推測は正しい。

正にこの現象は、精神世界からの直接のオルゴンドレインである。だが、その推測は、彼らにとって絶望的なものだった。

これを破る技術を確立する時間が無い。

あと数十分で全ての生命はオルゴンを吸い尽くされ、老衰するだ

ろっ。

そんなもん、簡単だぜ

人類は破る方法を知らなくとも、生命は知っていた。

虚無と同じく、テレパシーによる音声が響くと同時に、オルゴン吸収が止んだ。

“敵” よお、そんな方法でくれてやる命は、この地球圏にはありはしねえ

光よりも速く、愛よりも熱く、少年の瞳よりも輝くマルスニウムは、火星の大地から溢れ出てきた。

大気あるところの大気を振るわせ、エーテル溢れるところのエーテルを震わせ、魂あるところの魂を振るわせる。

その挑戦的な音声は、紛れもなく逞真・シチガシユクのものだった。

「なんだ、アレは!?!」

「分からん! 分からんぞお!」

ダレダ オマエハ

全人類が、全生命が、全能の虚無ですら火星から染み出したその戦士の名を知らない。

マルスニウムは闇の中で完成形へと流動的に変形していく。

モーフィング動画のように変わり続けるそれは、最終的に火星と同じ色をした二足・二本腕、人間を模したデザインになっていた。

ならば、一度だけ名乗ってやろう！ 俺の名を魂と歴史に掘り込め！

古代を思わせる鎧を纏い、月と並べる程度の体長を持つ剣士は兜を脱いで顔を晒し、口を開く。

俺の名はタクマ、敵を倒すという一能を修めた火星大帝だッ！

決して全能ではなく、何物も生み出さない戦神の星の暴君。

名乗りに続き、火星のふたつの月、フォボスとダイモスが逞真の手元に揃った。

「なんだ…月が…変形する？」

元々は、火星が断鉄の為に雌雄一对の剣として引力で保持していたふたつの月。

[illegible]

山至示現流奥義ッ！
開闢蜻蛉翔ッ！

時空さえも揺るがすスピードだが、空間自体に干渉してあえて古典力学的に、つまり光速を越えても時間を越えず、『ただ早いだけの剣』を繰り出した。

「相手は3パーセクあるんだぞお！ 太陽より巨大な相手に地球より小さな刀…。

シ・ネ

それは虚無の武器であり、肉体であり、フォークとナイフだった。

ガキじゃねえんだ！ “死ね”なんて頼むみてえな言い方するんじゃないねえ！

誰の眼からも見えない、虚無の体内で変化が起きていた。

突き刺さった刀が、加速度的に伸びていたのだ。

まるで樹木が大地から養分を吸い上げるように、根がアスファルトを砕くように。

男ならッ！ 云う言葉は“ブツ殺す”だけだぜアーッ！

ガ、ガウアアアッ

先ほど、虚無はオルゴンを吸収していた。

ということは、虚無は生命をプラスからマイナスに変えて吸収している。

それは陽子と陰子の関係にも似ていた。

クッテイルノカ クワレテイルノカ

戦争とは領空・領地・領海といった空間の取り合い、陣取りゲームだ。

今、蜜一文字は相手の空間を喰っていた。

そのエネルギーを取り込み、質量に変換している。

虚無のバイキングだあゝ！

蛮一文字だけでなかった。

逞真も虚無を喰っている、いやむしろ蛮一文字以上に食べ漁っている。

途方もない虚無のエネルギーを生命たるオルゴンエネルギーに変換し、それで肥えている。

巨大化していく。先ほどまで月ほどしかなかった逞真は天文単位で数える大きさになっている。

虚無もそれに対抗すべく、暗黒物質の攻撃を繰り返す。

暗黒物質たあ、珍味だよなあっ！

暗黒物質のミサイルは、逞真の腕に触れると同時に霧散するように吸収された。

虚無は数学的に複雑な構造を持つが故に、一部分ごとに綿密のデータが記録されていた。

それは全体がプラスに転じない限り消滅しないメリットでもあるが、全ての部位が急所となりうる短所でもある。

既にマルスニウムは、虚無の一片を喰らっていた。

その瞬間から、虚無の全ての攻撃パターンをマルスニウムは記録し、逞真が喰えるように変換できるようになった。

例えるならば、マルスニウムが凄腕のコック、逞真はフードファイトチャンピオン。

オラオラア！ そっちも噛みつけよ！ 喰い合おうぜえあ！

既に虚無も逞真に喰らい付き、相手をマイナスに転じて吸収していた。

だが、追いつけない。

虚無が逞真の腕一本分のエネルギーを吸収する間に、逞真は千手観音並に腕を生やせるだけのマイナスを喰っている。

キエル キエル キエテシマウ

それギャグか？ 虚無なんて最初から無いようなヤツの断末魔が消えちまう、ってことはねえだろ

デハ ナントイウノダ

知らねえよ、俺が分かってるのは俺のセリフだけだぜ

人類の限界は、脳の限界であると誰かが言った。

マルスニウムと一体化した逞真は脳という限界を破壊し、その純粹で果てない飢餓に限界はなくなっていた。

精神力はオルゴンエネルギーに繋がり、オルゴンエネルギーは他の全てのエネルギーに転用できる。

これは奇跡ではない。

大自然を超越し、火星にまで手を伸ばした人類にとっては過去に何度も有った欲望の発現に過ぎない。

俺の言葉はこれだ。　ごちそうさん、美味かったぜ

「…なにが、起きたんだ…!？」

人知を超えた大食い大会は、人知を超えずに客観視すれば光が1センチ進むより小さな時間でおきていた。

気が付いてみれば、眼前に広がっていた虚無は消え去り、火星大帝を名乗る戦士が巨大化している。

そして、その手に握られた刀、蛮一文字は太さこそ変わっていないが、刃の長さが銀河を飛び出すほどに伸びていた。

途中から、逞真は食べた脂肪的な虚無を蛮一文字に押し付けていたらしい。

「何が起きたんだッ！　何が起きたんだ！　何が起きたんだ！」

世界中の生命たちが、同じくして問い詰める。

先ほどのテレパシーのような解答があると思っているのだろう。

下らねえ、自分で考えろよ、俺は行くぜ

虚無を喰らい、様々な情報を得た逞真。

彼にとって既に太陽系は狭すぎて、情弱すぎた。

虚無は一体だけではない。

マルスニウムに宿っていた自由意思すら統合して喰い尽し、逞真は全てのマイナスの存在を食い尽くすために飛んだ。

ドップラー効果で真紅に染まる銀河の果てを目差して。

〔続〕

「死んだ…みんな…殺されちゃった…」

彼女の星は、天球を埋め尽くすほどの広大な敵に襲われていた。

文明は再起不能な域まで破壊され、生命は根絶されつつある。

軍隊は壊滅し、生残っているのは自身が開発したシエルターに隠れた研究者の彼女だけだった。

彼女の名は…いや、無意味だ。

もうこの宇宙に彼女以外に『彼女』という言葉に適応できる事象は存在しない。

なぜ、こんなことになったのだろうか？

自分たちは平和に暮していたはずだった。そのはずだった。

逆の次元ベクトルに住まう、プラス生命をエネルギーソースにし、山積していた問題をやっと解決できた。

マイナス五十億人ほどの人民は喜び、歓喜した矢先、ヤツが現れた。

こオんなところに隠れてたのかよ、もう一匹

彼女の心に破壊者のテレパシーが響く。

火星大帝を名乗り、全てのマイナス宇宙とマイナス生命体を喰らう破壊者、七ヶ宿逞真。

「なぜ、なぜなの！　どうして…どうしてあなたは…私たちの幸せを壊せるのよっ！？」

てめえらは、どうして答えるわけもねえ質問すのが好きなんだ？

彼女は覚悟を決めた、いや決めようとした。
そんな覚悟が成立するはずがないのだ。　理不尽な力への怒りと
悲しみが止め処などありはしない。

待てええええ！　破壊者アツ！

彼女は、そして火星大帝は、その第三のテレパシーが飛んできた
マイナス方角を振り向いた。

そこでは、マイナス銀河系の第四惑星である銀星の上に戦士が立っていた。

俺の名は銀星元帥のシルバリオン！ 火星大帝、キサマを打ち倒し、マイナス宇宙を救う者！

「シルバリオン、あなた…シルバリオンなのっ！？」

掛ける言葉はない。キミを捨てて銀星へと旅立ったのが俺だ。言葉で許してもらえはしない

新手の出現に、退屈そうだった火星大帝の顔に笑みが戻っていた。そのことに気付いてか気付かずか、銀星元帥は圧倒的な体格差に怯まず、火星大帝に噛み付いた。

そうだった！ 掛ける言葉などありはしない、ただ懸ける命があるのみッ！

こういつのを待ってたのよッ！ 俺は！ 50億銀河ぶりぐらいの喰い合いだ！

感情が交錯し、互いが互いを食べあう。マイナスとプラスの標準的な戦い方。

火星大帝は幾度も経験し、銀星元帥にも本能によって刻まれた生命の原初の戦法のひとつ。

体格と容積は戦力の絶対的決定要因ではないのだ。

通常の間では知覚できない速さの攻防　それを制したのは銀星元帥だった。

…勝った…！　勝ったぞ！

「やったの！？　シルバリオンっ！」

ああ、そうだ。　ヤツは…火星大帝は一片残らず吸収し、俺の一部になった

「じゃあ…！」

ヤツから取り込んだエネルギーで宇宙をぶっ壊して…？　なんだ、思考に…ノイズが…

銀星元帥は、間違いなく火星大帝を喰い尽くした。

素粒子のひとつも残さず、エネルギーや技を…そして、心と記憶を。

やるじゃねえか、銀星元帥ッ！　喰われちゃったぜあああ！

銀星元帥が歪み、水鏡に映る影のように揺らぎ、そしてその姿は火星大帝の様相となっていた。

飲まれた火星大帝の底なしの貪欲さは毒だった。
ポロニウムなどは非ではない、吸収した方が汚染される猛烈な疫病だった。

「そん…な…！」

希望を引き裂いた絶望は、黒いオーロラを宇宙に解き放ち、このマインス宇宙を完食してみせた。
その身をマイナスベクトルに変貌させたことにも気が付かず、火星大帝は次の宇宙を目指す。

今後、数学的に表せない数の宇宙と命を逞真は食い荒らすだろう。
その間、数多の戦士が立ち上がり、火星大帝を食い尽くそうとも、その者は逞真の記憶に汚染され、新たな火星大帝となる。

陰陽のベクトルを問わず、ただ貪欲に食い荒すその姿は、正にヨブによって記された獣の如く。

胃に餌食が募れば、食べた分だけ胃袋も伸び、それだけ多くの餌食を求む。

喰えば喰った分だけ胃が膨らみ、胃の余白が増え、飢餓が膨らむ…
火星大帝ベヒーモスは今日も往く。

その頃、こことは似て非なる兄弟宇宙では…！

「お父さん、どこに行くの…?」

「…ゴメンね、静虎^{せいこ}。」

お父さん、また遠くに行つて来るよ…プラスだろうとマイナスだろうと、みんなをイジめてるヤツが居るんだ」

「…いつてらっしゃい、お土産待ってるね…生きて、戻ってきてね」

「ああ、絶対に買ってくる。兄弟宇宙^{バラレルコスモ}でも、きっとペナントくらいは売つてると思うしね。」

…行くよ、ノポラシユバルツ、百兵衛、イーストウッドッ!」

その英雄は、仲間とともに静かに立ち上がった。

もうひとりの自分、殺戮と食欲だけを撒き散らす獣を討つべく、火星のヘラクレスは行く。

〔火星大帝 完〕

あとがき&オマケ集 本編ネタバレ有り

あとがきが本文なので、このスペースはなにもなし。
ただ、200文字以上無いといけならしいので、

『火星大帝VS火星英雄 ハイライト』

逞真「これこそ、開闢蜻蛉翔を越えたメガネウラ、メガネウラ終焉蜻蛉墮！」ギガネウラ

真一「喋るのは下らないんじゃないのか？」

逞真「下らないことを気にするな、ノリだ！」

DDシャウト「冷血動物の恐竜たちでは無理だった。だから今こそ戦え、熱血生物地球人ッ！」

百兵衛「まさか…人類は、人類はそんなことのために生み出されたというのかッ!？」

逞真「下らねえこと聞かせやがって、俺は最初から戦う気なんだよ」
百兵衛「待て、逞真ッ。 お前が死ねば、全ての因果が解ける…逃げる！」

逞真「お前の勝ちだ、全部持つてけ」

真一「…良いのか？」

逞真「良くねえよ、だが俺は弱すぎた。それだけだ」

真一「…お前の悪食、無駄にはしない…俺の悲しみと合わせて、ヤツを倒す！」

ラオル「甘い、甘い、ベリイイスイート！」

真一「落ち着くんだ静虎。 この哲激宇宙では愛は直進する性質を持たない、だが愛は反響する！」

逞真「愛はエコーさせる、ワンバウンドで取ればエネルギー量は倍になる！」

シルバリオン「やめろおおお！ お前のやっていることはお前も含む全人類への逆行行為ってこと、気付いてるのかッ！？」

百兵衛「当然だ」

ゴルドランザ「良い感じた。殺す価値も、殺される価値もある眼だぜ、トリーズナー」

DDシャウト「ビッグバンが止むッ、来るぞ、静虎ッ」

静虎「お願い、蛮一文字、もう一撃…頑張って」

蛮一文字「いや、ギガネウラでは無理だ静虎！ 覚えられたッ」

静虎「え、じゃあ、テラネウラッ！？」

蛮一文字「それでも足りん、アレしかないッ」

DDシャウト「今こそ放て、極々々々超々々々空速剣術、我道希蜻蛉^ラをッ！」

解説：壮大になりすぎて、10月2日（空想科学祭の締め切り）に確実に間に合わないという。

あとがき&オマケ集 本編ネタバレ有り（後書き）

ページ内検索は、F＋コントロールキーで、『@（数字）』でどうぞ。

@1：あとがき

@2：模範ツツコミ&解説

@3：みちのくセルフパロディ

@4：キャラクター語り

@1：あとがき

はじめまして、そしてお久しぶりです。 84gです。

おはようございます、こんにちは、こんばんは、空が綺麗ですね。

…TPOに合わせて好きな挨拶をどうぞ。

当作品はSFフェスタ2010参加作品です。

まず、今回のイベントは『バルからゴキヘ』一本で終了の予定でした。

しかしながら、『バルからゴキヘ』では投票で勝てない…という

テーマがダダ被りし、確実に負けている作品が早い段階で投稿作品リストに挙がっていました。

で、84gは『やるからには勝つ』が基本スタンスなので、勝てる作品を投稿します。

ポピュラーSFを標榜した『バルからゴキヘ』では分かりやすさを追求し、そこに穴ができるという惨事。

というわけで、当作品では、SFの華：曲解SFに挑戦しています。

SFというのは現実には決していないシチュエーションなのでリアリティを出すことに苦労するわけですが、

曲解SFはその逆の発想をする作品で、リアリティを度外視して作者の壮大で独創的な大法螺を楽しむ力テゴリです。

『そんなバカなww』とツツコミ入れたり、『おお、スゲースケールだ!』と吼える、と一粒で二度美味しい作品を目差しています。

で、一粒で二度美味しいといえ、この作品は縦書きと横書きで全く違うストーリーになっています。

横書き版は84gのいつもの作品という感じで、縦書き版は暗いシナリオです。

これは縦読みと横読みができる『なるつ』の機能を使いきろうとした結果で、色々とやろうとしてます。

それにコピペで済ませてる部分も多く、簡単に文字数が稼げて…ゲブンゲブン。

ただまあ、深く考察するとサイト批判になりますし、やる意味も意思もないのでスルーしますが、

せっかくなんだから、色々な作者さんには縦書きと横書き、両方に挑戦して欲しいですね。

無声映画と3D映画、WEBマンガと週刊誌マンガ、手書きアニメとデジタルアニメのように、一長一短がある文化だと思いますし、やってみたら、逆の方が向くかもしれませんね。

当作品の構想は、バルゴキと同じぐらいで2010年の8月ぐらい。

84gが『なるつ』に来る前から知ってる人しか判らない話ですが、

84gのアクションバトルといえば、『KOB忍法帖』とか『略

奪者』とかあの辺りになります。

これらは他のWEB小説書きさんのキャラを使ったパロディ作品で、完全オリジナルのバトルシーンは巨大ロボ小説の『汎用最終食品』だけ。

そのため、オリジナル・等身大・生身キャラのバトルは、これが初となります。

以下、参考にした作品。

キャプテンKEN（手塚治虫氏・著）

虚無戦記シリーズ（石川賢氏・著）

クイーン・エメラルダス（松本零士・著）

銃夢シリーズ（木城ゆきと氏・著）

風来忍法帖（山田風太郎氏・著）

シェーン（ジョージ・ステイブンス氏・監督）

独裁者（チャールズ・チャップリン氏・監督）

真マジンガー 衝撃！Z編（今川泰宏氏・監督）

剣豪 その流派と名刀（牧秀彦氏・著）

「太陽系」の地図帳（縣秀彦氏・監修）

@2：模範ツツコミ&解説

こうやってツツコミいれて楽しんでね、という模範解答。シャレのわからない人には勘違いされることがあるので、解説も兼任。

『オルゴン』

解説：

本当にナチスドイツは研究していた（らしい）。

ヒトラーが健康や超自然的なものに執着していたのは有名だが、現代の科学では否定されている。

当時してみれば新技術というのはゴロゴロ発見、実用化されていた時代だった。

代表は原子力兵器とかですかね。アレも最初は机上論の兵器と呼ばれてたそうですし。

つまり、ナチスドイツにしてみれば、そういう未知の技術開発はそう珍しくなかった。

ちなみに、現代でもオルゴン治療器とか売ってますが…マユツバという言葉の語源は、眉毛に唾を塗ると騙されなくなるという迷信からだそうです。

ツツコミ：

治るかああああ！　じゃ何か！？　お前の地元ではナニして絶頂すると、ケガ治るんか！？

『トラウム・ヒトラー』

解説：

ヒトラーが姪とそういう関係だったというのは、割と根強い意見。だが、なんというか、アブノーマルなところがあつたらしく、姪は実際の歴史ではヒトラーの拳銃で死亡している。

これが自殺か他殺か、意見が割れる。

ちなみに、トラウムはドイツ語で『夢』。

ツツコミ：

割と本気で研究してる人が居るから不思議だ。

『マルスニウム』

解説：

完全に架空です。陰子とか丸ごと。

現実には火星には誰も行っていないし、地層の大規模調査なんかできるわけもない。

そのため、ないとも証明できないというSFではちよくちよく使われる、ウソとはいえないが本当のわけもないという技法。
類似例はミノフスキー粒子とか。

ツッコミ：

っていうか、なんでマルスニウムが噴出すんだあああッ！
つか魂を集めるってどんな理屈だアア！ 適当云ってんじゃねええッ！

『テラフォーミング』

解説：

他の天体を地球化する架空の技術。

作中では特に言及していませんが、この作品では大気自体を他天体から掻き集める、という方法で一挙に大気を作っています。

太陽光の絶対的不足は、ミラーの衛星浮かべて、こぼれる分の太陽光を集めてます。

ツッコミ：

できるかアアア！ どんだけオルゴン万能やねん！

『極超硬合金』

解説：

現実にある超硬合金のパワーアップ版。

具体的には、現実ではレアメタル扱いされている金属が火星では容易に手に入り、そのアイソトープも大量に見つかっている。

その関係で予算が安くなり、性能が底上げされ、オーバーが付いている。

重金属は、重力のある惑星では重力圏離脱にコストが多く掛かるため、外貨に換えにくく、火星内部で出回ってるわけだ。

ツッコミ：

ネーミングが『極』てっ！ 『オーバー』てっ！

『火星御留流山至示現流』

解説：

地球で発生した野太刀示現流や薬丸自顕流の流れを汲む剣術。

火星の大気、重力、環境に適応し、ミリタリーバランスすら変える剣術。

ツッコミ：

ねーよ！ ていうか山至でなんで『さんじ』やねん！ 物理的に無理な技がしかねーだろ！

『超音速』 & 『極超音速』 & 『ソニックブーム』

解説：

一定以上の加速をし、音より早い速度が超音速。

地球上では時速1000キロ程だが、火星では大気組成の関係で音速が遅く、マッハが遅くなっている。

極超音速はマッハ5以上のことで、ソニックブームは音速を超えたことで大気に発生する波のこと。

ツッコミ：

重力3分の1でも超音速まで達しねーよ！ そんな肩があるならソニックブームで攻撃せずに石でも拾って投げろや！

『野田系の二天一流』

解説：

宮本武蔵の剣術として有名。

野田はその流派。

ツッコミ：

いや、実在するし。

『ハイドラショック』

解説：

実在の弾丸メーカー、アメリカ産。
非常に危険な弾丸。

ツツコミ：

劣化ウランを使うつてのはフィクション、つていうか貫通力が高く
てコストの高い劣化ウランをホローポイントじゃ使わねえだろ。

『火星ドーム』

解説：

気圧によつて人工重力を発生させている。

火星には気圧の合成させて維持するベルヌーイ型、ナノマシンで調
整するストークス型のドームがある。

ツツコミ：

重力が3倍に感じるほどの気圧だったら、まず呼吸なんかできねー
よ！

『ボイジャー7号』

解説：

現実にアメリカで使われている探査機シリーズ、ボイジャーの最新
型。

現実ではまだ2号。

ツツコミ：

戦争中でそんなもんを7つも上げる国力があるのか？

『この双剣を削る角度を達人的感覚でナノセンチ単位調整すること
で』

解説：

ナノセンチつてのは、ほとんど分子レベル。

ツツコミ：

できるかああああ！ 神経より細いレベルでどう調整すんねん！

『忍者』

解説：

いわずと知れた超人部隊。

作中の日本軍では根来、甲賀、伊賀の三派がある。

ツツコミ：

いや、存在そのものがツツコミどころだよな？

『マイナス宇宙』

解説：

ブラックホールとホワイトホールという理論があるが、あれのイメージで良い。

重力の逆のエネルギー法則が働いている世界のこと。

ツツコミ：

そもそも、マイナス宇宙から来た時点で人間は知覚できねーよ！

『火星研究所』

解説：

戦争行為を止める為に、交渉し続ける研究所。

実は現実の、とある研究所がモデル。

ツツコミ：

研究所ひとつなんかじゃ止まらねえのが戦争だよ…このツツコミ、ちよつと悲しいね。

@3：みちのくセルフパロディ

その1『火星大帝VS火星英雄 ハイライト』

逞真「これこそ、開闢蜻蛉翔を越えたメガネウラ、終焉蜻蛉墮！」
メガネウラ ギガネウラ

真一「喋るのは下らないんじゃないかったのか？」

逞真「下らないことを気にするな、ノリだ！」

DDシャウト「冷血動物の恐竜たちでは無理だった。だから今こそ戦え、熱血生物地球人ッ！」

百兵衛「まさか…人類は、人類はそんなことのために生み出されたというのかッ!？」

逞真「下らねえこと聞かせやがって、俺は最初から戦う気なんだよ」
百兵衛「待て、逞真ッ。 お前が死ねば、全ての因果が解ける…逃げる！」

逞真「お前の勝ちだ、全部持つてけ」

真一「…良いのか？」

逞真「良くねえよ、だが俺は弱すぎた。それだけだ」

真一「…お前の悪食、無駄にはしない…俺の悲しみと合わせて、ヤッを倒す！」

ラオル「甘い、甘い、ベリイイスイート！」

真一「落ち着くんだ静虎。 この哲激宇宙では愛は直進する性質を持たない、だが愛は反響する！」

逞真「愛はエコーさせろ、ワンバウンドで取ればエネルギー量は倍になる！」

シルバリオン「やめろおおお！ お前のやっていることはお前も含む全人類への逆行行為ってこと、気付いてるのかッ!？」

百兵衛「当然だ」

ゴルドランザ「良い感じだ。 殺す価値も、殺される価値もある眼だぜ、トリーズナー」

DDシャウト「ビッグバンが止む…ッ、来るぞ、静虎ッ」

静虎「お願い、蛮一文字、もう一撃…頑張つて」

蛮一文字「いや、ギガネウラでは無理だ静虎！ 覚えられたっ」

静虎「え、じゃあ、テラネウラッ!？」

蛮一文字「それでも足りん、アレしかないッ」

DDシャウト「今こそ放て、極々々々超々々々空速剣術、我道希蜻
蛉をッ！」

解説：壮大になりすぎて、10月2日（空想科学祭の締め切り）に
確実に間に合わないという。

その2『名乗りすぎる』

「俺の名は二天一系我流、姓は宮本、名を断鉄ッ。
名乗れッ、勇者たち」

断鉄の名乗り、生残っている兵士たちも武器をしまい、
肺一杯に空気を吸い込み、口上を思い出す。

「…生まれは満月の鰐隠れクレーター。
伊賀忍者、姓を下柘植、名を百兵衛」

「自分はナチスドイツ軍、金星方面星間軍第7師団所属、ドロウ・レオパルド少佐。」

ドイツ式システマ及び、テコンドーと極真空手を少々」

「ひとおーつ、人の世の生き血を啜り…！」

ふたあーつ、不埒な悪行三昧…！」

みいつつ、醜い浮き世の鬼を退治してくれよう、金太郎！」

「天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ、悪を倒せと俺を呼ぶ！」

聞け！ 悪人ども！ 俺は！ 正義の戦士、仮面ファイターストロングマン！」

「正義の願いが響くとき、裁きの炎が悪をこらす！ スピーディニヤンダー只今見参！」

「戦う交通安全！ 独走戦士！ カアアアア、レンダアッ！」

「銀の翼に希望を乗せて、灯せ平和の青信号ウ。」

戦士特急マイトガウィーン！ 定刻通りに只今到着！」

「さあ！」

『何人わかるかなッ！？』

解説：全部判ると、多分84gと同世代。

その3『バルVSゴキ』

「ただ葬式やるなら呼んでくれや、ダチの娘の弔辞ぐらいならいくらでもやってやる」

百兵衛はフロツピーを一枚を置き、ラベルに自分の電話番号を書き記してから出て行った。

火星や月では未だに電波整備が進んでおらず、多額のカンパをしなければ使えない携帯電話を持っているというだけで富裕層であることを表すステータスでもある。

「フロツピーって…月ではこういうの方が都合がいいんかいな」

死んだ最愛の妻の秘密を知りつつも、真一の心中には悲しみが淀み、精神を捉えて離さず、未だに生きていく理由を見出せなかった。生きていくだけの活力も情性も無くも、とりあえずフロツピーをテレビモニタに差込み、内容を読み始めた。

「10435197番のトロトロオムライス…？　なんだこれ？」

そのとき、突如として病室の扉が蹴り開けられた。

入ってきたのは、この病院の看護婦と患者がひとり。

「オイ！ それをこれにコピーしてくれ！」

患者は、USBを何本か差したマルチタップを投げつけた。
真一は流されるまま、それをマシンに繋げた。

「…わかりました。USBへの転送を許可します。」

…通った。

あとは、早撃ち勝負。

「んじゃあ…転送開始ッ！」

真一は上書きコピーを選択し、“マルチタップに差した全てのUSBに”ポーンのデータをコピーした。

看護婦がそれがどういう意味と意図で、それを患者にどのように質問するかを考える間に、コピーは完了した。

「なにを…」

「遅い！」

患者はマルチタップからリズミカルにコピーの終わったUSBを抜

き取り、窓に向う。

患者の意図を確信したりヨウコの操作する掃除機が患者へと体当たりを掛けてくるが、彼は避けはしない。

背中に当たり、腕に辺り、激痛が前身を衝く…が、負けないっ！

「やめてください。」

看護婦は言葉を発すると同時に、セキュリティを通じてリモコンで窓を閉める。

が、患者は痛みで感覚のない左腕を柱代わりにし、窓を閉じないように支える。

「…やめねーよ。」

右手には溢れんばかりに…何本かは本当に溢れたが…握られたUSB。

そして患者は下も見ず、窓からUSBをばら撒いた。

「う、うああアアアアアアアッ！？」

「…いや、ゴメンナサイ、何？」

「『バルからゴキヘ』もよろしくね、ってことだよ！」

解説：パロディ大好き人間ですが何か。

@4：キャラクター語り

七ヶ宿逞真

性格はTHE・84gキャラ。

他の自作品で言うと、蛭とか我道希とか、いつものパターン。

七ヶ宿という苗字は84gの近所…てほどでもないが、まあ近場の地名。

下の名前は、『ゲッターロボ アーク』の流拓馬から。 適当です。

七ヶ宿真一

性格は逞真の逆パターン。

横書き版のほうが先にプロットが完成していたので、その対比の為にこういうキャラに。

逞真が悩まないなら悩むヤツ、悩めるヤツを、と。

名前は、逞真がゲッターなら、こっちは魔獣戦線だろう、とあっさり決定。

七ヶ宿良虎

書きながら性格を決めたタイプ。

当初は子宮を抜き取ったとかそんな設定はなく、アドリブで進行しています。

84gが書ける女性のバリエーションは2〜4パターンぐらいなので、完全に性格は自作品、略奪者の主人公の焼き直し。

名前は、決めるのが面倒だったので、『バルからゴキヘ』からその

まま流用。

七ヶ宿鋭刃

THE・84gキャラその2。

特に濃くする必要も無いキャラだったので、いつものキャラです。名前は、84gのボツ作品の主人公から流用、リサイクルです。

ちなみに蛭一文字の設定もそのキャラからで、元ネタでは忍者でした。

宮本断鉄

苗字は二天一流の流れなので宮本、断鉄という名前は『敵にタクマが居るなら、こっちはダンテツだ!』と決定。

元ネタはダンガードA。

性格は縦書き版と横書き版で全然違っているものの、設定はほぼ同じ。

ちなみに作中では出す予定がなかったんですが愛用の雌雄刀の名前は設定済み。

それぞれ野仏三と刹蜘蛛。ノムサンとサツチです…好きな野球チームはイーグルですとも、ええ。

下柘植百兵衛

苗字は伊賀周辺の地名から取って、下の名前は忍者っぽくアドリブで。

当初は横書き版のヤラレ役として製作し、書いてる内に良い感じになったので縦書きでも登場。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9640n/>

火星御留流山至示現流

2010年10月9日07時41分発行